

俳句雜誌

令和三年四月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十四卷第四号

# 水 明

2021 4月号



《今月のかな女》

日永さや庭におりたつ縫疲れ

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

辞書を引いても「縫疲れ」という言葉は見付からないので、これはかな女の造語か、日常会話的な言葉であると思う。いろいろ調べる内に、インターネットのブログの中に「縫い疲れ」が出てきた。多分かな女が午前中から和裁に熱中していて、かなり疲れたのだろう。午後の陽が大分西に傾いた時刻。夏至までは未だふた月ほどあるが、庭に出て空を仰いだ時、何時の間にかすつかり日が延びたことを実感した。

(鬼之介・註)

# 水 明

第1087号

— 華の一句 —

一 つ 紋 お ろ し 銀 座 へ 初 芝 居

新 井 孝 磨

一つ紋は、三つ紋・五つ紋に比べると格は下がるが、無紋の着物よりも高級感がまさる。華の銀座と初芝居から、目指すは正月公演の歌舞伎座である。多分女性と思うが、それなりの風格を持つ男性かも知れない。和装用のバッグも粋にきまり、新春の銀座をしゃなりしゃなりと行く。

(鬼之介・推薦)

# 水明

令和3年  
4月号

華の一句

義 甲 (作品)

風 に 形 (近詠)

花 菜 漬 (近詠)

風 知 草 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」 (同人作品)

季音「月」 (同人作品)

季音「花」 (同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

住吉光弥

栢尾さく子

松井由紀子

井口俊晴

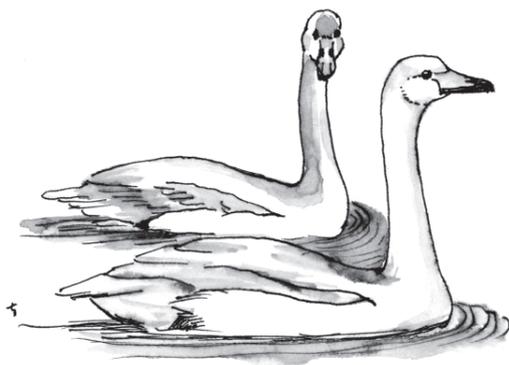
田寺玲子 永野史代  
西山貴美子 ほか

森本早苗 宇田白鷺  
鳥羽和風 ほか

正木萬蝶 大塚茂子  
近藤徹平 ほか

原 雅子

網野月を



# 水明集

梅澤輝翠  
原田秀子  
横山君夫  
ほか

水明集作品評

山本鬼之介

46

水琴窟 (水明集二月号鑑賞)

池田雅夫

50

山紫集

52

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

58

俳誌望見

梅澤佐江

29

句集喝采

近藤徹平

32

水明例会報・各地句会報

61・64

全国大会のお知らせ

69

全国大会兼題句募集

70

水明忌のお知らせ

71

水明発展基金御礼

72

風声

73

後記

74

題字・長谷川かな女 表紙・内田恵子 カット・福田千春

---

---

義  
甲

山本鬼之介

軍神の家系の庭ぞ春の雪

亀も鳴くかと亀と歩調を合はせけり

霾や月琴飾るシヨークース

---

浄瑠璃の艶物のあと春の雨  
都をどりのポスター街にお中日  
茶屋あそびしたる気分に朧月  
董野や宝ジエンヌの今むかし  
陽炎の中へ融けゆく別れかな

# 風に形

吉住光弥

水仙や新陰しん流かげの末裔す風を斬る  
狐橋春のお百度風まに艶  
風光る山野喝采串だんご  
ゴスペルの重くしなやか白椿  
春の雲むかしの流う行歌たを口づさみ  
立春と聞けばその気に玉子焼  
梅紅白風に形かたちの生れたる

お・年・な・の・に・、・こ・ん・な・ご・時・勢・、・勿・論・  
己の非力を弁護するつもりはさらさら  
らないのだが：部屋のと片付けを  
している、「小説・武士道」と云  
う昔の本に足止め？、武士はそのと  
き何を捨て何を選んだのか……にい  
ささかの共鳴、昭和始めに、日本刀  
を手放すことのなかった、曾祖母の  
姿を、久しぶりに思い出す楽しい幸  
せの日々でした。

巢ごもりや梅咲く空に人を恋ひ

# 花菜漬

栢尾 さく子

能樂堂春爛漫の待たるる日  
怪しげな口伝の民話雪の寺  
春昼の仄暗き部屋双鶏図  
花菜漬箸も会話もはづむ朝  
梅咲いて五合目の旗さわがしき  
迎春花咲きそめ届く陽のはした  
次々と尻餅すべる芽吹き山

シューベルトの冬の旅を聴くたび  
一人顔を赤らめる。女学生の頃音楽  
の授業のあと「ハルカサカリテ」と  
云う言葉を私は理解できなく学友の  
誰、かれに聞いて歩いた。「春傘借  
りて」ってどう云うことだろう、と。  
時が過ぎて、或る日楽譜と別に菩提  
樹の詩が縦書きされた教本を手にし  
てやっと私の疑問は解けた「遥か離  
りて」だったのである。この様な迂  
闊さは私の日常のことである。

# 風知草

季音雪欄作家近詠鑑賞

松井由紀子

◇有難し（二月号）

五明 昇

◇菩提寺（二月号）

矢作水尾

「搔つ込め」に継る人波年の市  
束の間の社務所の息ひ晦日蕎麦  
除夜の鐘忘れ上手を身上に

搔つ込めとは、西の市で売る縁起物の熊手の一種です。き  
らきらと飾りつけた縁起物の熊手を商う露店、食べ物の屋台  
などが浦和調神社の西の市（十二日まち）では中山道に一キ  
口余り連なり夜遅くまで賑わいます。昨年末は中止淋しい歳  
末でしたが今搔つ込みたいのは当り前の無事な日常なのでし  
ょう。忘れ上手は生き方上手、作者は生得の大らかさを得手  
に不穏な年の瀬も悠々と越されたに違いありません。

健やかな世過ぎの証賀状来る  
年立つつや木遣りの響く日本橋

高齢になると年賀状とは年々用意するのが億劫になるちょ  
っと困った仕来りです。しかし身勝手なことに貰うのはこよ  
なく嬉しい。ゆつたりと盃を傾けながら誰彼の健在を確かめ  
る喜びは年賀状ならではです。私ももう暫らくは続けること  
にしましょう。木遣唄は深川の木場の仕事唄が元のようにです。  
正月江戸火消の粋な身拵えで日本橋を渡る集団、喉自慢の音  
頭とりに続く力強い唱和が晴れわたった空に響きます。

山門をくぐれば音の落葉かな  
茶の花や緑青の屋根反り返る

音の落葉とはなんと繊細な！乾いた落葉のさざめきと境内  
の清清しさがそしてそこに立つ作者の澄んだ心境まで感じる  
ことが出来ます。白い茶の花と灰緑色の銅葺きの屋根の色ど  
り作者の視線はすつと屋根の反りへ、美しい反りは風景の構  
図を決めお句の構成もまたここで決められたと思えました。

禅寺の小砂利湿らす里時雨  
落葉舞ふ墓碑に受賞の香をたく  
結願を果せし寺の照紅葉

時雨が濡らす寺院の静かな佇まい、受賞の喜びを亡き人と  
分かち合う充足のひととき香は薫り祈りは深いのです。結願  
とは最後の法要を済ませられたのでしょうか。赤々と照る紅葉、  
美しさと安堵感が伝わって来ます。どのお句も目の前の事象  
をなだらかな言葉で紡がれて素直な共感を呼び起こされます。  
その真摯で優しいお人柄からは私も老いの日々をしつかりと  
生き抜く作法を教えて頂けるように思います。

◇眠たくて（二月号）

椎野美代子

人肌の温みふふみし手編みのセーター  
お日様の笑つてるよなアンゴラセーター  
モヘアセーター生きているから眠たくて

これらのお句に向き合っていると、作者は生れたての感覚を真つ直ぐ伝えることを大切にそれを濁すまいとの意思をお持ちだと思えます。ふふむは含むのほかに膨らむの意もあり手編みのセーターは本当に暖かそうです。アンゴラもモヘアもその柔らかな手触りは幸せそのもののよう。私の好きな歌「おやすみ」作詞三木露風のなかに「毛糸の寝巻きにくるまって、おやすみおやすみ鐘が鳴る」というフレーズがあり外は真つ暗木枯しの夜。でも部屋は温かく明るい。ここではどうしてもくるまるのは毛糸の寝巻きでなくてはなりません。

鹿の角壁にカウチンセーターの葉巻  
ゴリラは毛布相身たがひて古セーター

壁に掛かった鹿の角、太糸ざっくりのカウチンセーター。の葉巻で現れた男性は良い匂いの葉巻を燻らせそこには暖炉も犬も見えて来ます。なんだか手品のよう。二足歩行を始めた頃人間は全身毛で掩われていたそうです。彼らは苛酷な寒冷期をその豊かな体毛で寄り合い抱き合い生き抜いたのでしょうか。セーターへの親しさはその原初の記憶への回帰でしょう。

◇早春（二月号）

田寺玲子

春節の銅鑼打ち廻る中華街  
春浅き旧居留地の煉瓦館

春節は中国を故郷に持つ人々の大切な行事、今年は二月十二日が旧暦の元旦でした。がコロナ禍、自粛要請による閉塞感このやりきれなさを陽気な銅鑼で払拭したいと人々は願った筈です。打ち廻るには悪疫退散の意気込みが感じられます。旧居留地数年前私も歩きました。大震災後修復された煉瓦館の界限は昔のままの異国情緒をとり戻していました。浅い春の薄い陽ざしは仄かに煉瓦を温めています。

向き変へるフェリー余寒の風まどひ  
冴返る野鳥断層そのままに  
ミモザ咲く窓より流るアベマリア

まだ風の冷たい港からフェリーが出航する。ゆっくりと船首を回した航路の先の海は穏やかにきらめいているでしょう。余寒の風は間もなく訪れる瀬戸内の春の呼び水のようにです。阪神・淡路大震災で殆ど潰滅した神戸は二十六年を経て見事に復興しました。春を告げるミモザ、聴こえてくるアベマリアそれらはこの街の平和の象徴なのでしょう。

自然の災害も疫病もいつまた襲って来るか解りませんが、今はこの安らかな風景が決して壊れることのないようにと願うばかりです。

# 硯箱

◆季音二月

井口俊晴

湯豆腐や夫婦で交はず二合半酒

鈴木康世

冬の夜、長年連れ添った二人が湯豆腐の鍋を囲んで晩酌を  
楽しんでる。暖房がほどよく効いた部屋はほっこりと暖か  
で気分が和む。鍋を置いた食卓の上にあるのは、普通よりち  
よっと大きめの二合半（こなから）徳利。二人ともいけるく  
ちなので、これで足りるかどうか。顔がほんのり赤くなった  
夫が、お酒を注いでくれる。差しつ差されつ、話題はといえ  
ば、去年生まれた孫のこと。テレビもつけず、老夫婦の時間  
がゆっくり流れていく。

冬の月 I S S の過りけり

田寺玲子

身震いするような冬の夜、空には煌々と満月が輝いている。  
たいていの家は夕食を済ませ、テレビを見て、あとは寝るだ  
けという時間。今頃通りを歩いているのは、残業で帰りが遅  
くなったサラリーマンくらいだ。そんな夜中に、高度四〇〇

キの上空を I S S（国際宇宙ステーション）が横切って行っ  
た。I S Sには日本の実験棟「きぼう」があり、宇宙飛行士  
の野口さんが乗っている。きつと仲間の宇宙飛行士と一緒に  
忙しく立ち働いていることだろう。

銃口の気配背に置く霜の夜

永野史代

独りで過ごす真冬の夜はいかにも心細い。今さらお化けが  
出ると怖がる歳ではないが、しんしんと霜が降りる音が聞こ  
えるような、そんな気がする心細く寂しい夜である。じつと  
部屋に座っていると、背後の暗がりには潜んでいる、何か悪意  
を持った誰かに、さつきから銃口を向けられているような気  
がしてならない。怪しい物音を立てる者はいないか、廊下が  
軋む音はしてこないか、油断なく体全体を耳にして、身を硬  
くしている私なのだ。

寒木瓜やポキツと頸椎骨の音

小倉倭子

真冬だというのに真つ赤な木瓜の花を見つけた。樹々は葉を落とし、無彩色の世界が広がる中、鮮やかな花の色は貴重で嬉しくなる。と、顔を振り向けたその拍子に、首の骨がポキッと鳴ったようだ。やれ膝や腰が痛い、首が回らなくなった、そんな体の不調を感じることも多くなった毎日。先日は外出先で石に躓き、危うく転ぶところだった。寒木瓜の鋭く尖った棘は、ささくれ立った自身の骨そのもののような気がしてならない。

## 六尺二寸トンビ似合ひの好々爺

森本早苗

最近の若者は身長一八〇<sup>センチ</sup>くらいある人も珍しくなくなつたが、老人となると、ちよつとそうはいかない。それが六尺二寸、つまり一九〇<sup>センチ</sup>弱もあるというのだからすごい。老人はいつもニコニコ人の好い顔をして、元気に街を歩いている。身に着けているのはトンビと言つて、漱石の小説などに出てくる、ちよつとクラシックな外套。それが何とも様になるのだ。なんだか楽しい物語が始まりそうである。

## 花八ツ手赤子のグーはいつ開く

町野広子

庭の八ツ手が花をつけた。まあ面白い白い球のような可愛い花。寒い風に吹かれて、かじかんだ赤ん坊の拳みたいだ。ち

つちやな指をグーの形に握りしめた赤ん坊。生まれて間もない、今はおっぱいを飲んで寝るのが仕事の赤ん坊も、あと何か月かすれば、きつと握りしめた手を開き、色々な物を掴むようになる。それはいつだろうか。春が待ち遠しいように、グーが開くのが楽しみ。

## 国境も領海も無き冬銀河

大塚茂子

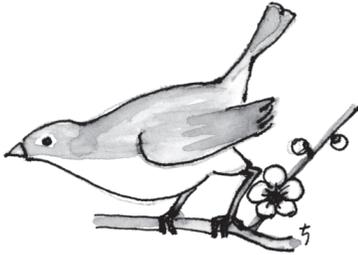
真冬の空いっぱいには、真砂をちりばめたように銀河が広がっている。海も山も、都会も田舎も、何万光年も離れた宇宙から見れば、人間の営みなどちっぽけなもの。北方領土上空へのロシア軍用機の領空侵犯、尖閣諸島沖での中国海警局警備艇の領海侵犯と、新聞やテレビは大騒ぎしているが、どれをとっても、取るに足らない小さな事。だって天の川銀河が生まれたのは百億年以上も昔なのだから。

## 寒月に侍る光雲天女めく

上戸千津子

ご近所が寝静まった頃、独り外に出て空を仰ぐと、冬の月が煌々と辺りを照らしている。晴れてはいるが、うつすらと雲が出てきて、月の周囲を滲んだようにぼおーっと見せている。流れるように見えて光る雲は、まるで女主人であるお月様に従う天女たちようだ。私のために、一夜限りの王朝絵巻が始まるうとしている。

季音雪



風あそぶ 田寺玲子

源平の海の海苔粗朶風あそぶ  
春浅き小昼の河口稚魚群るる  
浅春の波止へくづるる波の色  
唐門を抜けゆく風や牡丹の芽  
護摩焚のひびく境内牡丹の芽

告白 永野史代

夕支度すませてよりの春の風邪  
少年に野性の戻る野焼かな  
下萌や地球に産毛はえさうな  
告白が闇に溶けゆく春の夜  
片栗の花しづもりて野戦あと

春の闇 西山貴美子

余寒なほ鳥屋の羽毛に風少し  
風に倣へ人にも倣へ柳の芽  
力抜かぬ蕾もありぬ枝垂梅  
春の闇ドア・チェーンが揺れてをり  
人に依る余生もありぬ春の闇

早春 波多野寿子

はなびらのやうな淡雪秋子の忌  
やはらかな日ざしに芽吹く嵯迷の忌  
どこからか風の囁き梅三分  
早春や白磁の皿のカルパッチョ  
楽譜閉ぢ振り向く窓に春の月

青 饅 星野和葉

青饅や宮より受けし夫婦箸  
青饅やひと言多き人ばかり  
青饅や過ぎし日のこと忘れまじ  
刃を入れてさくつと香る芽独活かな  
山独活の太さ香りも太きかな

野火 茂木和子

家中の時報まぢまぢ春の闇  
かくれんぼ「もういいかい」と春の闇  
太陽を捉へんと野火立ち上がる  
真つ当な生き方をして野を焼きぬ  
水筒の水がごろんと焼野原

早春 矢作水尾

早春やきらめく波を分つ水尾  
早春の土の底より水の音  
青深き水菜の畑に歩み入る  
天守から町の果までかすみけり  
浅春や光る地の色空の色

ゆりかもめ 山中みどり

濃紅茶にジャムたつぷりと春の朝  
梅二月両手に包むマグカップ  
アマリリス太き花の芽人の逝く  
荒東風やきりきりと鳴る舳ひ綱  
春北風の川面に漂ふゆりかもめ

春来る 由良ゆら女

百二百青竹踏むや春来る  
紅白の風ふところに梅の花  
愛の日や髪の先までカカオの香  
ギヤロップに春の空へと乗馬帽  
久に逢ふ花かたくりの夢にまで

下 萌 吉住光弥

蔵町の澱むかをり来<sup>く</sup>春の闇  
下萌をつむや五体のきらめく日  
残生や下萌に身の青みたる  
耕<sup>ながし</sup>人先<sup>びと</sup>づは畏敬を天と地に  
春暁やひろげ喝采めく日差し

P W 網野月を

果て太鼓 石山かつ子

春浅しPWは孫の誕生日  
かたばなや還暦過ぎて一目惚れ  
春菊や所帯染みたる次女の笑み  
都境の私鉄沿線はな菜風  
四分の三生きたと思ふ桜待つ

春浅し水きらきらと四ツ手網  
はじめから釣果なかなか一花草  
ほほけだつ水菜の株を何とせむ  
雪ちらちら国技館より果て太鼓  
寒月光落城跡の大手門

玉砂利 石井喜恵

宇宙船 大橋廸代

夕暮や鳥の休める冬木立  
玉砂利に己が陰ふむ寒日和  
百度踏む歩幅小さく寒の寺  
初鏡誰のためでもない笑顔  
悩ましきてにをは切字初句会

あかときのメダカ張りつく薄氷  
万籟におそるおそるの牡丹の芽  
裏坂は忍者溜りや牡丹の芽  
女体かとまがふ流木蘆の角  
宇宙船去りひかりだす春北斗

坊泊り 大村節代

海苔舟の影の重なる東京湾  
海苔<sup>ひび</sup>筥へ不審な舟のひたひたと  
空きつ腹なだめなだめて春捜し  
春浅し出羽三山に坊泊り  
捺印に力を込める春の夜

遺句集 栢尾 さく子

なつかしき水辺の匂ひ竹の秋  
狩衣を東風が揺するや能舞台  
遺句集が問ひかけてきて寒き春  
羚羊にはじめて出逢ふ芽吹き山  
傘立てに殿様蛙弥撒はじまる

薄水 菊池ひろこ

薄水や紙の軽さの母となり  
公魚を釣る人カメラ担ぐ人  
高麗菊街に「黙食」野に香気  
春浅し色分けに置く植木鉢  
春炬燵かつて破門になりしとや

揉み手 五明 昇

バレンタインデーふはりと届く女文字  
春寒し揉み手絶やさぬ青物屋  
水切りの石の煌き春きざす  
名鶯の声を伝ふる秘湯宿  
そよ風とワルツを踊るクロツカス

発禁の境延昭

鼓草 島津初花

発禁の過去ある名著室の花  
居酒屋の二階が根城破れ襖  
春寒しキーホルダーに知らぬ鍵  
窯場には素焼のかけら下萌ゆる  
羽二重のぼかしの裏地春の燭

桜草陽を重ねきて咲き揃ふ  
梅の花師の旅いまは何の辺り  
歩の先のたんぽぽ一輪金メダル  
岩走る水のかかりし露の臺  
西向きの岸に寄り添ふ鼓草

青む 椎野美代子

襖襦のお尻 鈴木康世

下萌ゆる錆の匂ひの引込線  
下萌や転がし拵ぐ設計図  
雀斑のやけに濃くなる草青む  
小流れの水唄つてる畦青む  
下萌に戯びの鞭を遊ばせて

海鼠腸が恋の火種をかきたつる  
梅の花数値減りたる赤血球  
春鴨と襖襦のお尻並びをり  
水底に紆余曲折の蜷の道  
桜貝文筥より出づ椰一葉

# 季音月

捨て釜

森本早苗

羅漢様とてマスクしなざる播州路  
捨て釜に投げ入れの梅蔵の町  
五右衛門を茹でし釜やもたんぼぼ野  
牡丹の芽百花の王の目覚めかな  
窮屈に生きるコロナ下落の臺

春の風

宇田白鷺

雪見酒はたと浮びし吉良屋敷  
打つ波を征し寒暁沖の石  
おん祭り女流の句掛け日吉館  
蹴飛ばせばがさりと崩れ残る雪  
畳屋の看板はがれ春の風

婿殿

鳥羽和風

立春の鯉美くしき水輪かな  
籍入れて待つは子宝牡丹の芽  
花鳥や雲浜獅子の跳ねて舞ふ  
婿殿に鶏潰す春祭  
遮断機に貫ふ欠伸も春深し

四温晴

井上燈女

地鎮祭幣のちぎれし春嵐  
麦三寸こぞりて育つ田の広さ  
建売の畦に座りて芹を摘む  
雨来るか一ト日を濡らす今日雨水  
栄一像赤城見てゐる四温晴

熱気球

丸山マスマ

寒九の湯身ぬちの澱を解きほぐす  
狼の守る山々梅ほのか  
熱気球七色十色草萌ゆる  
坂東太郎今日のご機嫌水温む  
つくし野にコーラスの湧く昼下り

春の闇 大場順子

試着室のうぬぼれ鏡 春隣  
でんぐり返りの双手に大地草萌ゆる  
ほどけそむ絹の光の薄氷  
岩陰や羽衣ほどに残る雪  
馥郁と土の膨らむ春の闇

寒満月 森川義子

寒満月大河を渡る終電車  
見送りはいつも此処まで冬の月  
鏡なす水甕にいま寒満月  
交番の前のつべらぼうの雪達磨  
早春や表紙華やぐ新刊書

草青む 高島寛治

草青む馬の背光る競馬場  
水温む空にふはりと観覧車  
三色旗はためく湖畔水温む  
待ち合はす銀座の和光春シヨール  
薄氷や心のうちを少しづつ

葱坊主 内田恵子

キューピーの背に小さき羽葱の花  
弟は兄を追ひかけ葱坊主  
自転車の外す補助輪下萌ゆる  
思ひ思ひに吹くりコーダー草萌ゆる  
強張りて渡る吊橋初音かな

笹鳴き 森田祥絵

手入れよき御苑の枯れの景色かな  
北斗の柄傾ぐ大地の四方の枯れ  
冬青空貼り絵のごとき観覧車  
早梅や溝に水音睦み合ふ  
笹鳴きや二つ来ているおむすび山

石屋 町野広子

手袋にまつ赤な爪を隠し持つ  
手袋を脱ぎて柏手打ちにけり  
寒四郎石屋に数多の鑿のと槌づち  
寒の月刃先の反りし眉 鋏  
白梅や伏し目が癖となりし我

マスク 山田 美佐尾

名台詞客も着飾る初芝居  
早春や鹿の子の絞り半襟に  
経蔵をくまなく照らす冬の月  
篝火を焚きて白魚透きとほる  
眉太き男の面輪黒マスク

早春 荒井 俱子

春寒し踵ではかる骨密度  
鶏鳴の消えし小字や春寒し  
春浅し廊下を急ぐ配膳車  
まんさくや切れ味鈍き花鋏  
梅日和なれど外出ままならず

緩い坂 藤澤 喜久

寒波来る列島白く口噤む  
寒明けの歩を確かむる緩い坂  
紛れなく壊れゆく身や柳絮飛ぶ  
コロナ禍に傾ぐ暗鬼の風邪薬  
躓きし恋の石くれラガー蹴り

春の蝶 渡辺 舍人

春が来てゐます胎内阿弥陀仏  
春来るうしろすがたのいい車  
蝶飛べる内緒話を言ひ触らし  
疫痢には我関せず焉懐手  
笑ふ山顔文字にある哀樂喜怒

回顧 小倉 倭子

寒月へ心の弓矢射る構へ  
禁じられし恋の回顧や寒月下  
いつの間に時は移ろひ春の虹  
春菊を洗ふ葉末のたなごころ  
春菊や気色伺ふ夫の膳

牡丹の芽 十倉 和子

竜宮門くぐるやそこも牡丹の芽  
つまづいて羞ぢらふ尼僧牡丹の芽  
梅寒し一揆の署名放射なす  
羽根ひろぐやうな巫女舞梅日和  
釣具屋の魚拓のはねる椿東風

白孔雀

柚木 治子

着付け終ふ鏡華やか春シヨール  
春愁や憑かれたやうに打つ鼓  
ブルースで踊りたくなる春の闇  
春の闇羽しつとりと白孔雀  
振り向けば脂粉のなごり春の闇

春浅し

井関 礼子

騒めきし世情に籠もり春寒し  
籠もり居し間にはや春の立ちにけり  
南々東に淡き日差しや春浅し  
寒暖を繰り返しつつ春遅々と  
万物に恵みの日射し春立てり

箍ゆるむ

池田 雅夫

如月やゆるみし箍の痕くきり  
春雨の置きみやげ細濁る川  
本降りの雨の洗札春の山  
蒼天に千手震はせ木の芽かな  
春雷や目を瞑りゐる石仏

初午

松宮 保人

寒暁や外灯点滅してゐたり  
老松は明かり集めて雪見寺  
初午や新鈴の緒の紅と白  
寒戻る阿吽の眼や仁王門  
通夜帰り露地の足元冴返る

春障子

原田 想子

病む妻の箸遅々として若菜粥  
着脹れし患者脱ぐのを医者待てり  
手鏡に梅を映して笑みし妻  
閉めしまま光愛でるや春障子  
大いなる句碑称へなん木々芽吹く

昔語り

霜中 冬至

ものさしの鯨尺もある針供養  
こんにやくも豆腐も主役針供め  
花鳥が昭和の余韻こもらせて  
屈辱を受けける花鳥等閑に  
宿命は耕しと受け野良にあり

梅の花 川崎道子

梅の花口角上がる仁王像

山寺のロビーに甲冑春寒し

春寒し諸手に重き火縄銃

陳列の孫文の銃 冴返る

牡丹の芽紅殻残る細格子

冬 枯 岡野順子

冬枯の庭鉄材を積み上げて

冬枯の園我に来る雀かな

冬枯の生垣満たす記念樹よ

空中をたゆたふ羽や春の闇

玄関の鍵穴に鍵春の闇

羽搏く 伊藤敦子

追悼のトランペットや震災忌

寒満月きらめく星を遠ざけり

生産<sup>うぶすな</sup>神の雀ふくれて春を待つ

梅一輪咲いたと動画帰れぬ子

ほぐれむと羽搏く気配牡丹の芽

最近の名句集を探る 座談会

齋藤愼爾 山口襄 『星空』

筑紫磐井<sup>司会</sup> 谷佳紀 『ひらひら』

辻美奈子 春日石彦 『天球儀』

山本潔 『俳句四季』

◆巻頭三句 全国俳句大会

伊藤政美 予選通過作品発表

暮目良雨 ◆今月の華

八染藍子 成川雅夫

浅井民子 羽村美和子

島村 正 \*その時、俳句手帳

二上貴夫 鈴木貞雄

◆好評連載 神作研一

筑紫磐井 手のひらの江戸

坂口昌弘 | 古典籍を旅する

忘れ得ぬ俳人と秀句 藤村公洋

青木亮人 俳句のつまみ

句の手触り、 酒井佐忠

俳人の響き、 本の窓辺

大西朋 二ノ宮一雄

俳句へのまなざし 一望百里

藤枝リュウジ◎新連載

俳句四季 Haiku Shiki

2021年5月号

4月20日発売 定価1000円(税込)

http://www.tokyoshiki.co.jp/ 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

# 季音花

麗人

正木萬蝶

山ひとつ枯れて木霊の吹きだまり  
 冬枯や琥珀に虫の深ねむり  
 春菊を茹でて浄土の見え隠れ  
 生きてゐる証し春菊ほろ苦く  
 霜夜斯くも麗し草笛光子かな

独活

大塚茂子

山独活に秩父味噌ぬり酒機嫌  
 息ひそめすくすく伸ぶる洞の独活  
 梅香る風につぼみを解かれて  
 結願に梅一輪の峡険路  
 逝きし友甦りけり梅真白

首塚

近藤徹平

寒月や首塚晒す大手町  
 終バスの消え去る尾灯春の闇  
 山笑ふ札所詣でのどさ回り  
 実に虚を加減の戯作室の花  
 宇宙にも果てのあるはず亀鳴けり

春

宮崎チアキ

診察日四温のひと日遣ひ切る  
 寿の二人の門出春立つ日  
 公魚や吾も湖上の氷点下  
 春の野に遊ぶや諸手羽撃かせ  
 余韻濃きダンスレッスン春の闇

華やぐ

河野はるみ

羽田発七時の空や春浅し  
 川に沿ひ橋わたりゆく早春  
 早春に少し華やぐ独り膳  
 春菊や目を瞑り鼻つまみして食ぶ  
 白魚よまなこ逸らしてをどり食ひ

名草の芽 飛永 鼓

別れ霜發車合図の無き駅に  
湧き出づる畑の計画名草の芽  
転た寝の夢跡たぐる春の宵  
本閉ぢてなほ鳴き止まぬ猫の恋  
裏表ありて男女や沈丁花

春浅し 井上玲子

閃光を放つ小流れ春浅し  
陽を弾き回る水車や下萌ゆる  
隠沼に水浴ぶ鳥や草萌ゆる  
陽を仰ぎ歓喜の合唱福寿草  
白魚の眼さやかに皿小鉢

小糠雨 梅澤佐江

本心をえぐられさうな冬の月  
浅春の音を吐き出すレジスター  
姿見の奥の暗がり春浅し  
早春やルージユの色を明るめに  
白魚膳彼の日と同じ小糠雨

浅春 松井 由紀子

灯油売る触れ声遠き寒戻り  
春浅し珊瑚の数珠の若き施主  
横顔のやさしきひとと梅見かな  
春風や笑ふばかりの老仲間  
早生れでありし子二十歳梅かほる

寒稽古 井口俊晴

振り下ろす刃の唸り寒稽古  
全集中鬼よ失せろと豆を撒く  
散策の帽子目深や春寒し  
川風にミーミー鳴くか猫柳  
光あふれピアノ窓辺にクロッカス

鶯餅 野口和子

春遅々と漢方薬にオブラート  
鶯餅どちらが尾やら頭やら  
猫柳断捨離といふ流行語  
春灯し二階に点かぬ子供部屋  
初午祭ラジカセを手に宮司来る

春 茜

上戸 千津子

万葉の森にときめき春茜  
水音に急かされ銀の猫柳  
露味噌の苦味の旨さ老いてこそ  
囀りに水琴窟の音消され  
春暁やいつもの景が異国めく

春の雪

石田慶子

くたくたの春菊つつく男の眼  
茎太し春菊くるむ新聞紙  
下萌やテント張られて地鎮祭  
草萌ゆる足をとられてマルチーズ  
春の雪ホットワインへ角砂糖

朝の杜

熊倉千重子

公魚や何故かおとなり良く釣れて  
浅春の鳥語こまやか朝の杜  
連翹や城址に黒き門今も  
芭蕉像に逢うて深川あさり飯  
目の滋養と今日も御代り蜆汁

白 魚

野平美紗子

老漁夫の昔語りや白魚漁  
懐かしき母の強面春の夢  
新婚の夕餉の卓の目刺かな  
春一番急かされている昨日  
春一番割烹着の袖ふくらます

湯気の香

福田千春

草萌や跳ねて乳追ふ羊の仔  
下萌や補助輪はづし漕ぎ出しぬ  
幸半分こ二人で一本恵方巻  
春立つや産み月の娘の電話待つ  
春菊を入れて湯の香ととのひぬ

春 菊

菅原知子

高麗菊地産地消の畑より  
春菊を愛でて癒され胡麻よごし  
土手青む足投げ出せば飛行機雲  
下萌や尻むずむずと空青し  
立春や行く先々の青信号

梅 中野

梅開き四角となりし朝の窓  
豆まいて福なるかすかな音をきく  
春一番うれしき便りものせて来ぬ  
満開の梅を感じる眠りかな  
満開の梅がわが庭ふくらます

疆

春疾風 田中章嘉

佐保姫の目覚めを誘ふ鳥の声  
公園のサッカー少年春疾風  
春疾風砂塵をよけるベビーカー  
春光の水槽の水揺らぎをり  
命日の墓前の煙春の野辺

鯛焼 宮崎紫水

始業時の鐘ふんはりと春隣  
自動車の霜を解かせば日和なり  
下校児の列くつきりと日脚伸ぶ  
鯛焼の腹ががぶりと真つ先に  
入院し三寒退院して四温

鮫鍋 下川光子

海原に夕陽平たく鮫鯨鍋  
鮫鯨鍋五臓六腑を食べつくす  
亜米利加の大統領は黒マスク  
横町のマスクに会釈マスクして  
あちこちに兎等固まつて下萌ゆる

石の狐 松山清子

雪やけの子も顔出せる七回忌  
薄氷を池の端に寄せ燥ぐ子等  
白梅や宮の石狐の眼の憂ひ  
縄文の復元住居芽木の風  
春光の館内に座す火焰土器

梅の光 西浦千枝子

一軒家へ他府県ナンバー建日  
春日差す部屋へ移しぬ手芸箱  
吉野山和紙売る店や梅の花  
梅林へころころ集ふシルバーカー  
村人の梅見の席へ赤ワイン

春の服 後藤綾子

木の芽晴れ亀の親子の甲羅干し  
 神苑に響く余寒の風の音  
 梅香る覗き窓ある冠木門  
 犬六匹春服きせて散歩する  
 濠端のビルの灯煌々と早や二月

☆

☆

特集

につぼん花列島

北は北海道から南は沖縄まで  
 全国14結社による俳句の花便り

巻頭作品10句

大輪靖宏・片山由美子・鹿又英一  
 佐怒賀正美・長島衣伊子・西村和子  
 野中亮介・日下野由季

俳壇

5月号

4月14日発売  
 定価900円(税込)

巻頭エッセイ  
 村上軼彦

八木健選 滑稽俳壇

四季巡詠33句【第Ⅱ期】：大島雄作・奥名春江

連載

ものがたりのある俳句……………高柳克弘  
 いきもの歳時記……………角谷昌子  
 俳句史を見直す……………秋尾敏  
 続々日本の樹木十二選……………広渡敬雄  
 俳壇史エピソード……………坂口昌弘  
 思想としての虚子……………中村雅樹

俳句と随想12か月

菅野孝夫・柴田多鶴子

本阿弥書店

〒101-0064

東京都千代田区神田猿樂町2-1-8 三恵ビル 電話03 (3294) 7068 振替00100-5-164430

# 『水明誌』を繙く（水明二月号）

原 雅子（梟「窓」同人・「窓」代表）

地震跡を残せる渚鰯東風（七頁）

田寺玲子

「地震跡」といわれて即座に浮かぶのは阪神淡路・三陸・福島・熊本などの地名である。ひんぱんに起こった地震の被害は土地の様相を変え人々の生活を変え、しかも完全な復旧に至っていないのは周知のことで、いま名をあげた各地も例外ではない。その意味では場所を特定しなくとも海岸に面した地域を想像するだけで一句の意は十分に果たされる。

その上で、もう少しこまやかに味わってみたくするのは「鰯東風」の季語があるからだ。魚偏に春と書くこの魚はまさに春、産卵のために沿岸に寄せてくるのだそう、瀬戸内海の鰯漁は春の風物詩。神戸辺りの漁港の活気は格別という。関西では鰯をことに好むらしく、「どの窓の灯にも人影鰯どき 友岡子郷」によっても、この時期の海辺の町の雰囲気がよくうかがわれる。「東風」の語は王朝の歌言葉となる以前は、瀬戸内その他の漁労民の間で鰯東風をはじめ雲雀東風や桜東風など、生活に密着した言葉として使われていたとのこと。

掲出句は阪神淡路大震災で大きな被害を受けた神戸港付近を詠んだもの。一見、放置されたままの被災の痕跡かと思ってしまうのだが、ここの「残せる」とは、地震で崩れた岸壁や街灯などを記憶にとどめるために、遺構として保存した状態を指している。生活の再建に力を尽くした人々の活力が「鰯東風」にこめられているかのようだ。

時雨るるや鉱山跡の異人館（五二頁）

仲田利子

〈景〉だけを提示してそれ以外を語ろうとしない潔い作品。それだけに読み手にとっては手強い一句といえるだろう。自由な鑑賞を許しつつ、鑑賞の逸脱を峻拒する厳しさを持っている。

鉱山の歴史は古い。鉱石には金銀銅をはじめ鉄鉱・鉛・亜鉛など多くの種類があり、古代の採掘跡も各地に残るが、現在の私たちの記憶に親しいのは江戸時代以降だろう。とりわけ、富国強兵が急務だった幕末から明治の初期、多岐に渡る鉱山関係の技術は格段に進歩した。その原動力となったのがいわゆるお雇い外国人、政府及び民間に招聘された鉱山技術者たちだった。掲句の「鉱山」に対して唐突に感じられた「異人」とはこのことに違いない。「異人館」は彼等が居住した建物を指すのではなかったらうか。

ここまで句を辿ってきて思い出した。これにそっくりな場所を見たことがあったのだった。秋田県山間部を走る内陸縦貫鉄道。そこに阿仁合駅がある。阿仁鉱山跡は駅に近く異人館も残っていた。江戸期から操業は続いていたが、日中戦争時代軍事特需で賑わったあと、戦後に資源枯渇で閉山された。

廃墟の鉱山というものは侘しい。明治の西洋の匂いを伝える異人館も役割を終えた寒々しさに包まれている。「時雨」は訪れた時の事実だったろうが鉱山跡の状況を眼にした作者の心象そのものを伝えている。

# 俳誌望見 梅澤佐江

『草笛』 令和二年十二月号 通巻五〇〇号

代表 太田土男 発行所 岩手県盛岡市

昭和二七年、浅沼弘一が盛岡で創刊。特定の師系なく「俳句の多様性を認め、個性尊重の風土詠を目指し、東北的なものを発信する」を理念とする。(隔月刊)

代表詠「浮塵子」 五句より

自然薯を掘りて気儘に暮らしをり

自然薯は、貝原益軒も「大和本草」に著しているが古来より滋養強壯食として珍重され、山菜の王者、漢方名で(山菜)とも呼ばれる。自然の中で土に触れ思うままに生きる、壮健で心豊かな暮らし振りが見える。

菊脴 南部の酒を選びけり

(蝶も来て酔を吸う菊の脴かな) 芭蕉も愛した風流に秋の味覚菊脴、酒はとなれば南部盛岡の地酒しかあるまい。

実盛は討たれ浮塵子のはびこれり

木曾義仲も幼少時(二歳)の命の恩人のその死を悲しんだという、戦乱の世で「武士の鑑」とされた斎藤実盛の討死、片や稲の大害虫である浮塵子は一向に駆除出来ないという裏腹な取合せの妙味。因みに浮塵子は実盛の霊を鎮めて稲虫を退散させるの由来により(さねもりむし)とも呼ばれる。

夜長し 昔話をも う一つ

秋になると夜がめつきり長くなつたと感じられる。昔話に

花が咲き大分更けたと思ったが時計を見ると未だ宵の口、ではもう一つ昔話でも。和やかな夜である。

虫時雨牛舎泊りとなりけり

静まり返った牧場に鳴きしきる虫の声、難産だったが無事に子牛を取り上げて気付くと空が白み始めている。(とうとう牛舎泊りとなつてしまったなあ) と思いつつも達成感で満たされている。

俳号のように土を愛し、東北をこよなく愛し、農耕の民や風土を愛して止まない作者、自然と自然に関わる暮らしの中

で詠まれた句なのである。

草炎集(同人作品Ⅰ) 自選 六四名 各五句より 五名

とびとびにひとの口読み日向ほこ 小菅白藤

ちぐはぐな会話の弾む今年酒 北田祥子

巾ひの椅子ラーメンの椅子冬至 千葉信子

秋の日や久慈の琥珀の耳飾り 大澤保子

天高し黄金田進むコンバイン 村谷龍四郎

草響集(同人作品Ⅱ) 代表選 四一名 各五句より 三名

シーソーの兄空にあり初紅葉 米内幸子

運動会ゴールせし子の皆一番 田辺厚生

差別問ふ若き論客眉さやか 田代節子

草笛・雑詠集 代表選 六〇名 各四句より 三名

山の端へ夕日押し遣るばつたんこ 四日市洋子

皺の顔恥じず誇らず年寄りの日 高島ふみ女

月光に影の瘦せたる鴝の賛 織田宗卯

太田土男代表の「俳句のほとり 七十八」は佐藤鬼房の句集を辿り、その為人と真髓に触れる講評は圧巻で感銘を受けた。創刊五百号記念号に相応しい読み応えのある誌面である。

# 現代俳句鑑賞

## 網野月を

先生の遺品に杖と冬帽子

宇多喜代子

〔俳壇〕 2月号・杖の日より

作者の俳句の恩師ならば桂信子氏であろうけれども、研究者でもある作者は、大学での恩師もいらっしやることであろう。ともかく「先生の」遺されたものを、今では作者ご自身も手に取ることがあるということである。中七の「……に」の助詞は、その後の省略があり切れが生じている様である。他に「手のつづき脚のつづきの杖ひんやり」がある。

山頂の道標秋の蝶の舞ふよ

岡田日郎

〔俳壇〕 2月号・毅然より

理由なく好きな句、秀抜と考える。嫌いなものには理由があるのだが、好きなものには理由がない。いや言葉にはならないということであろうか。その点は味覚と同じである。好きな食べ物に理由がないのは、体が感じているということである。匂いや食感がびったりするということであり、鼓動に合うリズムを持つているということである。掲句の叙している景は意外な景ではあるのだが。

糸をひく飴煮の鯉を年の宿

原 雅子

〔俳句四季〕 2月号・冬景色

長野県佐久当たりの鯉の甘露煮は有名である。砂糖、醤油と味醂の他に水あめなどを使用するのである。普通は小魚などを食材にするのだが、佐久では丸々とした鯉をぶつ切りにして甘露煮にするのである。中七の「……を」が「食する」を省略して余韻を引き出している。一呼吸置いて後に座五の「年の宿」が置かれて時間と空間の指定が定まっている。季語としての過不足ない効き方の王道を示している。

引退の投手冬めく芝を踏み

山本鬼之介

〔俳句四季〕 2月号・冬の彩り

中七の季語「冬めく」は初冬の季語である。「冬めく芝」としているのは大自然であり、「踏」んでいるのは「引退の投手」である。つまり天為と人為が交錯しているのである。シーズンが終わっての引退試合でもあるか？人工芝ではないグラウンドであるから、プロ野球ではなくて、社会人野球くらいの手を想像してみた。座五の「踏み」が連用形で余韻と切れを作り出しているので、句跨りのリズム感がおさまっ

ているのである。

### ゆきだるまどこかに杉の匂ひして

武藤 紀子

〔俳句界〕2月号・自選30句より〕

上五の季語「ゆきだるま」が生きて行動している様である。雪景色の中は、通常、無音と無臭なのであるが、「杉の匂ひ」がしてくるのであり、融けた雪に濡れた杉材が匂を放っているのである。「ゆきだるま」に体温があつて、雪である自身の体を融かして杉を濡らしているように思えてしまうほどである。ファンタスティックな句なのである。他に「男来て冬日を青といひにけり」がある。

### この仔猫頭悪しと撫でてをり

土屋 義方

〔俳句界〕2月号・頭悪しより〕

ペットの愛玩のポイントは飼い主それぞれであり、また飼われているペットそれぞれでもある。俳句表現では「この」の代名詞+格助詞はあまり使用しないのだが、掲句の場合は「この」の効果が活きている。また「……悪しと」の文語表現ではあるが、実際には口語表現で愛玩しているように想像されて、諧謔を増幅しているようだ。

### 前傾に越えゆく山路西行忌

甲斐 遊糸

〔俳句〕2月号・西行忌より〕

座五の季語「西行忌」が抜群である。「西行忌」で構想された作句であろうけれども、上五中七から季語を導き出した

ように見える自然さがある。句意にも上五の「前傾」が効き過ぎるほどに効いている。憎いほど上手いのである。他に「峠より見放みさぐる富士や寒の朝」がある。

### 暗転に水鳥だけが残される

北山 順

〔俳句〕2月号・花八手より〕

作者は令和二年度の兜太現代俳句新人賞受賞者である。掲句には新人賞の授賞作品には無かった陰影を感じとることが出来る。「暗転」が日暮れと解釈されるところだが、舞台用語でもあるから、そう考えると「水鳥」の無機質な感覚が見え隠れしてくる。

### 菜の花や昔にかへる道がある

太田 土男

### 隠沼にけふの落花を加へけり

### 還らざるものに軍馬も草の花

〔句集「草泊り」より〕

いずれも作者の第五句集に収録の句である。二〇一五年から二〇一九年までの近詠である。このような句境に触れるだけでも有難いことだと思つて。特に目新しい技法を駆使しているでもなく、平生の言葉の世界で表現していて、敢えて難しい言葉も入れ込まない。何よりも表現の自然さが宝物のように思う。作者の日常、身の回りであることを作者の言葉で書いていて、無理なく、力まずに、思い浮かべた事柄がそのままに俳句に成っているのである。

## 句集喝采

近藤徹平

### ◆今瀬剛一「甚六」

本阿弥書店

著者略歴 昭和十一年茨城県生。同三十六年「夏草」入会、同四十六年「沖」創刊に参加、能村登四郎に師事、同六十二年「対岸」創刊主宰。「対岸」等十句集刊。俳人協会副会長。

著者は俳句の実作とともに俳句評論、指導書を多数著している。「あとがき」で「今後何年の生を賜れるか分からない。生ある限り自己表現としての俳句を愛し続けたい」と記す。

初鏡 この顔で押し通すかな

薄氷にありありと風及びけり

総領の甚六として福沸

蝉時雨巨木は今も伸びつづけ

鏡餅置けさうに風ぎ渡るなり

第一句は句集冒頭の句で、第十一句集となれば今更改まる必要がない。第二句、本年は厳冬で薄氷を観察できたので納得。第三句は表題句、甚六には嘲りの意を含むが著者の照れ隠しと解したい。因みに筆者も生年と総領は著者と同じなので深く共鳴した。第四句、第五句、深い観察から生まれた句。

死して乾く涙と思ふ夏薊

幾人を送れば終はる青嵐

第一句は亡き知人達への追悼句。五年間に詠んだ本句集には前書付きで十五人を追悼している。第二句、追悼句は生き残った者の務めと考えたい。次の句集を大いに期待したい。

### ◆山田貴世「山祇」

角川書店

著者略歴 昭和十六年静岡生。同四十三年「小鹿」入会、同五十三年「波」入会、同六十二年「波」編集長、平成二十八年「波」主宰。「わだつみ」等三句集刊。現代俳句協会会員。

「あとがき」に「俳句は自然に生かされ、人とのかわりの中で自己の内面を見詰め直し高めていくもの」と記す。

人と居て一日はればれ花八手

山祇に遅日の空の無限大

空という無辺の器雪降り

うつし世のひと日ためり酔芙蓉

福島は未だ「フクシマ」枯木立

月朧湖といいう涙壺

八月やいくつ拾いし虚貝

第一句、コロナ禍の下で会合自粛を迫るが人間は会うことが本性的なのだ。本句集「山祇」は第一句集「わだつみ」を意識した表題と思う。山祇句は五句あるが、第二句を表題句と解した。無限大という数学用語を詠み込んだ言葉の衝撃に脱帽。第三句は空を器と喝破した感性が魅力。第四句、現世と酔芙蓉の一日の変化を対比して絶妙。第五句は福島原発事故が社会に与えた衝撃を捉えて妙味。第六句は湖を涙壺ととらえる妙味。第七句は巻末句で敗戦忌・原爆忌の八月を虚貝ととらえて余韻。「波」創刊四十周年を迎え益々の発展を祈る。

山本鬼之介 選

水明集

漬物の樽の重さや冬深し  
大寒の飛行機雲の鋒よ  
蕪苞の裾を食み出す冬牡丹  
寒牡丹屈んで見れば華華し  
時が過ぎてても立往生の雪の道

表紙剥ぎ折鶴とせり初暦  
冬星の今も舁めく故郷かな  
友の計に走る山河や冬銀河  
満開といふもつつまし冬桜  
一月の教室埋むる墨字かな

さいたま 梅澤輝翠

上尾 横山君夫

炭の尉そつとそのまま春隣  
冬座敷手斧目残る黒き梁  
風鎮の丸き瑠璃玉冬座敷  
竹垣に紅さす一花寒椿  
心なき風のいたづら寒椿

火吹竹湯加減聞きし頃の風呂  
煮凝や妣の秘伝を受け継げず  
大晦日鶏捌く考の顔  
寒牡丹素顔を隠す大女優  
冬うらら都電一日乗車券

貧乏神のでんと居座る年の暮  
降誕祭ダヴィデの星の旗が立つ  
初夢や妻に看取られ大往生  
膝小僧抱いて寝まるよ寒四郎  
老いてなほ滾る鬨魂寒稽古

紅さすほどに啄まれゆく実千両  
遠火事やサイレンの音消え去りぬ  
落ちたれどなほ艶やかに寒椿  
水仙や小野小町を髣髴す  
久闊の友より賀状届きけり

高崎 原田秀子

さいたま 保坂翔太

染谷正信

反町 修

マスクして遊びをせむと初句会

さいたま 曲淵徹雄

なにとなき冬のもの音朝の床  
「碧天の青深まりぬ冬桜」

沼に射す入り日の水脈を浮寝鳥  
殺処分鶏百十四万羽星冴ゆる

大寒や野沢菜桶の水が咬む

西幅公子

冬牡丹満めん笑みの赤子かな  
まな板に大地の香り初若菜

大寒や湯気立ちのぼる朝の川  
大寒や割られし薪が宙を飛ぶ

神籤引く袂のゆれや松の内  
木洩れ日に神社華やく松の内  
風花や赤子の髪に光来る  
もう一人の我を励ます初鏡  
残照の沼に影置く浮寝鳥

川口野田静香

見得を切り睨みきはまる初芝居

塩野久子

大僧正迎ふる僧侶初太鼓  
炯炯と師匠の喝や寒稽古

体育館に声が轟く寒稽古  
風花や能登の荒海眼裏に

鉄瓶の奏づるリズム年新た  
焼き鳥を返す親父の太き指  
猪口二つ父の通ひし焼き鳥屋  
若水や闇の中より明烏  
冬深し能登の番屋の漁師飯

さいたま 日高道を

初日射す一人一人にある暮し  
顕なる生命線や蔦枯るる

熊谷越田栄子

玻璃越しの光奥まで冬座敷  
くれなるの艶極まれり寒椿

始まりの音は土から春待てり

代々の軸の重さや元日草  
蒼天に富士差し上ぐる出初かな  
ゆつたりと地球を回す鯨かな  
一味違ふ男にならん寒晒  
梅早し海へ海への棚田かな

青木鶴城

平塚丸屋詠子

陽が命枯蔦生くる形あらは  
若かりし頃の追憶蔦枯るる  
厳しくも美しきかな凍り滝  
凍滝の尊厳ここに極まるや  
十畳に大輪の華寒椿

東京 鈴木和子

望外の福引求め列が延ぶ  
彈初いかのぼりの三味の二上り神楽坂  
風関東平野睥睨す  
コロナ禍に名を借り一家寝正月  
冬草や錆びて置きざり三輪車

さいたま 村杉清吉

一つ紋おろし銀座へ初芝居  
初芝居色気千両男伊達  
唇に最中張り付く松の内  
年寄は迎へていいよ春隣  
鎌倉の五山巡るや松の内

さいたま 新井孝磨

大寒の僧の荒行水の音  
大寒や喉越しの良き朝の水  
菰の中白無垢然と冬牡丹  
門前の足跡もしや雪女  
花街に人影消えて雪女郎

洪谷きいち

新 曆文

お迎への知らせはまだか去年今年  
マスク美人の棧敷を埋むる初芝居  
風花をのせてやりたき紅葉の手  
吹越や路地より匂ふ焼まんぢゅう  
膝送りして土俵見物寒稽古

海老蔵のあの目力を初芝居  
寒稽古小さき拳にかすり傷  
神棚に深く一礼寒稽古  
甲高き声は美少女寒稽古  
松の内官庁街をバイク便

枯蔦の一木抱く生きざまよ  
枯蔦に息づく蔦を怖れをり  
今日明日と年の重みの初湯かな  
気軽さや肩書すてて初日享く  
春を待つ樹々は息吹をみなぎらし

熊谷 神田治江

遠火事やめ組の頭継ぎ来る  
近在に伝はる噂雪女郎  
枝打の若き庭師と挨拶す  
戦国の御家興亡読はじめ  
ピロシキを言葉少なに女正月

橋本京子

雑煮食ふ嗅覚味覚確かなる  
初富士の影迫りくる車窓かな  
丁寧に珈琲豆を挽く三日  
ともがらと持ち寄る料理小正月  
帯揚は祖母の形見よ着衣始

東京 石川理恵

セロの音に今宵浸らむ冬銀河  
枝先に降りて燿ふ冬の星  
春日野の巫女や清しき冬桜  
天空の賢治のレール星冴ゆる  
天蓋のごとき故郷の冬銀河

春日部 諏訪サヨ子

米寿超す刀自の写メール冬ぬくし  
窓越しの弾むシヨパンよ雪催  
夫の忌を丸で囲みて初暦  
初夢や我はアンカーテープ切る  
影ひとつ動かぬ疎林寒日和

さいたま 斎藤みよ

眠られぬ夜の窓鳴らす虎落笛  
焼詣の売り声きけば子ら走る  
焼詣食ふ戦中戦後思ひつつ  
夕暮や石路の明りの照らす門  
村はづれ濡れて冬めく地蔵尊

栃木 佐々木典子

晩年の歲月速し去年今年  
人ごとのやうな齡の年迎へ  
仏壇の母の遺影に晦日蕎麦  
コロナ禍や三密守り冬籠り  
寒椿傘寿の紅を少し濃く

杉戸 佐々木史女

風呂吹や土間に食卓ありし頃  
飛び立ちて自由得たるや虎落笛  
寒菊の赤荒庭を支へをり  
石積みの井戸より淑気昇り来て  
疎覚えなる一節の歌加留多

伊予 向井章子

冬の山膝を痛めし大男  
あるだけの包丁磨き事始  
寒鯛の競り声太く遅しく  
杯を受くる喜寿の手淑気満つ  
初詣コロナ収束願ふのみ

若狭 山崎郁子

銀盤の王者の軌跡淑気たつ  
夢の素粒子京の雑煮と胡麻豆腐  
風の田に生くるロゼット若菜かな  
水痛く言葉少なく寒の入  
寝静まる町の守り人雪達磨

越谷 阿部幸代

丁寧に記す一筆初日記

東京 太田絹映

さいたま 千坂平通

馴染みたる不忍池初弁天  
女正月お喋り弾む赤ワイン  
宝籤買ふ列に付き小正月  
鯨を見んと大海原へ観光船

オホーツク白々上がる初日の出  
年玉を親が召し上げ恵比寿願  
六段の調間こゆる三が日  
暗闇に希望の光初日の出  
正月や志立て望む徳

故郷の扉は固しお茶の花

町田 瀬戸雄二郎

人影のなくとも凜と冬牡丹

竹澤和子

コピーせし紙に温もり冬至かな

大樽に汲み置き水が氷点下

湯豆腐やポトルに汲みしはけの水

影伸ぶる巨大時計冬休み

正月の埠頭に暗き貨物船

大寒や速報ニュースの赤き文字

初日出る人に見られるポーズして

大寒や車のドアに静電気

いま少し語りたかつた夢始め

さいたま 池田珪子

川口 新井のり子

新しき終の栖や老の春

凍滝のしりへに潜むものの音

鯛焼を青磁に盛りて吾子二人

初鏡ひざを崩して恋語り

背中の児やつと眠りに雪催

初鏡一部始終を覗られけり

大寒や今日の西日をいとほしむ

凍滝に来る人は皆口結ぶ  
着ぶくれて家出る妻の独り言

雑踏を真知子巻して寒に入る

菅原真理

和歌山 葛城千世子

藁苞の陰にたをやか冬牡丹

一郭の風艶めかす寒牡丹

冬木立懐深き鳥かごに

とび職の会話軽妙初仕事

川面に湯気背景隠す寒の内  
立ちし鷺我閑せずと鴨泳ぐ  
飛び飛びの石となりゐる小鴨達  
車拭きし指先を湯に寒の朝  
マフラーは白と決めたる女学生

三峰に狼の吐く淑気かな

さいたま 飯田忠男

淑気の満つる鹿島の杜の黎明よ  
その話素面じや聞けぬ福笑

彼の世でも転がしるるや雪達磨  
分校で子等を待ちるる雪だるま

ことごとと若菜の香り朝の粥

森下美智枝

二万歩のごほうび華麗冬牡丹  
冬牡丹絢爛たるや菰の内

懸命に若菜摘む祖母蘇る  
県庁の櫺絵立ち寒の入

七度目の干支の丑鳴く初寝覚

霜多光代

京かんざし飾りて祝ふ女正月  
娘の活けし薔薇の香りや女正月

冬薔薇午前零時の深き紅  
うつらうつら首振る猫や冬ぬくし

日記買ふ明るき柄を探しをり

若狭 檜鼻ことは

小吉に微笑む妻や初鴉  
冬なれば漬物石のごとき空

初句会十七文字を祝ひけり  
子には子の歌うたはせよ大白鳥

吉川 杉浦理恵

寿ぎの言の葉を選び初句会  
肅肅と疫明けと春待ち祈る  
泣くまじと拳握る子寒卵

春待ちぬ息子飲み会オンライン  
初夢を見むと気負ひし朝ぼらけ

菘並び地藏様かと寒牡丹

さいたま 小川洋子

紅を濃く気持新たに冬牡丹  
大寒や水道管にころも着せ

大寒に上がる血圧憂ひ顔  
箱膳の御節に還るむかしかな

八幡の銀杏黄色の神神し

横浜 川島典虎

薄水の靴跡ふめば金属音  
春休みお国訛の長電話

米二キロ背負ひよろめく春疾風  
婆さまの外持ちの冬菜りヤカーに

年玉や子の顔浮かべ袋折る  
お年玉紙のお金と三歳児

風花舞ふ国分寺跡栄華失せ  
風花や松葉ひらりと芭蕉庵

届けたし水仙の香や母の元

草加 外村紀子

産院の窓に影置く冬薔薇  
暮早し惣菜店は量り売り  
寒林の古刹に残る葵紋  
冬木立映して湖の鎮まれり  
初夢や竿は鯛を踊らせて

さいたま 森 美枝子

引き算の臍となりて年流る  
若水の水切りに落つ赤き実を  
今年限りと賀状の追記吾もまた  
初風呂や仕度整ひ車椅子  
小寒の施設去る人肘タツチ

さいたま 和田仁八郎

真青なる初空より子滑り来る  
小正月土人形の赤き頬  
畦道をゆく長き影冬至の日  
正月の風を抱きて大夕日  
年の瀬の里の宅配潮の香よ

川崎 鈴木玲子

初夢や見るより画く夢の欲し  
老ゆるとは斯くの如きか初鏡  
膝に乗る猫も老老初鏡  
鳥総松幣供へある屋敷神  
四日早や貸し農園に人の影

東京 水落守伊

ぼつねんとただひとり座す小正月  
ささやかな秘密持ちたり寒の鯉  
銀座高架脇三本の冬桜咲く  
佇みし庚申塚の石露の花  
寒風を我がものとして伸びあがる

東京 畑宮栄子

威儀正し硯の海に寒の水  
有り難や卒寿祝ひの梅一輪  
たこ焼の売れぬ店あり雪催  
大寒やひとり気儘に赤ワイン  
男衆も買物急ぎ雪催

さいたま 高橋敏子

一斉に千羽鶴立つ初御空  
伊勢海老や神神は皆酒が好き  
寒の水羅漢の眼蘇る  
寒の水老いの脳天覚醒す  
僧達の黙して早し初湯かな

小浜 松島寛久

マスク干すマスク持みの去年今年  
日章旗掲げ初日を拝みをり  
これよりは賀状辞退と添書に  
黒焦げの達磨傾げる飾り焚き  
老犬と飼主相似る枯野道

本橋稀香

大向うの声も華やく初芝居

魂の揺るる思ひや初芝居

下戸も一献呑みたき気分松の内

床柱ことに輝く松の内

春の陽が宴盛り上ぐる歓迎会

早梅や絵馬の英文右上市り

早梅や手はポケットで指を折り

冬の草土にべつたり葉を広く

筋トレのドンと足踏む寒の入

蠟梅の一枝のせて回覧板

高速道ライトの帯や山眠る

闇の原ぼつと浮き出る枯芒

冬晴や欄干に二羽鷺白し

冬うらら野原を駆くる子らの影

冬うらら荷物両手に立ち話

山際の息吹直送露の臺

車窓越し僅かみどりの露の臺

寒明けや手作りジャムの蓋を開く

止め処無く春の雪降り噤む里

校庭のかけ声高し春の空

さいたま 篠崎紀子

綿貫ひさの

湯浅 和

小正月いつもの碗に手鞠の麩

訪客にアルバム開く小正月

湯に入れば底ひんやりと小正月

干支の牛うすらと埃小正月

波の果あれは鯨かひようたん島か

着ぶかれて急げどバスに乗り遅れ

今日もまた電話のなくて冬ざるる

内内の話の長し年の暮

ほつとして眠りさうなる柚子湯かな

ささやかな年越蕎麦をすすりけり

窓からの宇宙吾がもの春を待つ

春待つや小さき社に小さき願

結水の白幡沼や鳥歩む

早梅や赤城嵐を割りて立つ

空機屋鋸屋根に霜の花

久々の会話頼もし初電話

鏡餅据えて居間の整へり

七日なり手造り餃子欲しくなる

受験生縁起担ぎのカツ喰ふ

寒の水丸葉三粒流し込む

東京 山中いちい

さいたま 水野興二

横山礼子

蕨 細井良子

大袈裟にハグして太極拳はじめ  
いそいそと産の手伝ひ旅始  
エプロンの袖たくし上げ四日かな  
家計簿の空欄のまま七日かな  
七草も粥も忘れて卒寿過ぐ

いすみ 平石睦子

寒風に満月高く極まりぬ  
袋田は凍滝神の成す如く  
間に合ひし友の新居や初鏡  
曾孫きて大婆うれし初鏡  
八十四の齡を凜と初散歩

川口 田村福美

稜線に雲の花咲く寒落暉  
コロナ禍や五分換気の髪寒し  
鳴りつづくナースコールや冬の夜  
看護婦長通ればこぼれ実千両  
揺れやまぬ芽吹き柳を涙目に

横浜 山岸弘子

赤べこの頭を押して春を待つ  
待春や新色リップ鏡台に  
細枝の蕾綻び梅早し  
梅早いいつもの猫の通ひ道  
早梅や小さき神社に光射す

さいたま 樋口元美

岩肌にびたり張りつく凍てし滝  
名瀑の凍滝わづか流れをり  
かんざしのすまし顔かな初鏡  
初鏡じつと見つむる年の功  
ためさるるおばばの力初鏡

さいたま 山岸久美子

待春や新築物件入居乞ふ  
川音の春待つ鼓動聞こえけり  
早梅を見過ごし絵馬に願ひ記す  
早梅に近寄る人の笑みこぼる  
降り続き除雪車昼夜出払ひぬ

岡田宣子

初化粧合せ鏡を入念に  
凍滝やしばしの間ストライキ  
ことごとくオブリジェのやうな氷り滝  
水嵩が壺に沈みし冬の滝  
ものずきな観光客よ冬の滝

遠西勢津子

命がけで尽くす看護師野水仙  
水仙花遺影の友はすまし顔  
年玉のうれしさ奪ふコロナの禍  
お飾りにアマビエ下げて子のはしやぐ  
賀状から溜息の漏れコロナの禍

松田朋子

待ち望む恙無き日々年新た  
コロナ禍や闇に紛れて初社  
待つ母に帰れぬ訳を初電話  
伊勢海老に「戴きます」と鎧裂く  
コロナ禍のビデオ御礼やお年玉

さいたま 山戸美子

一条の煙浅間の冬晴れ間  
影を踏む幼の遊び冬うらら  
待春の気分膨らむ今日の風  
朝まだき首すくめつつ寒稽古  
初春や朝から夫は徳利酒

さいたま 鈴木藻好

突然の花火広がる年の暮  
コロナ禍や密と無縁の過疎の冬  
寒の入気合を入れてウォーキング  
節ひかへ餅はおしるし自分流  
新年のテレビ電話の贈りもの

鬼石 榊原聰子

初夢を猫に邪魔さる朝まだき  
春着きてマスクで隠す二重あご  
コロナ禍のふるさと遠き春着かな  
神棚に鎮座片目の福達磨  
街道の名残りの蔵や冬珊瑚

田中泰子

冬座敷人生ゲームの采弾む  
枯蔦や焙煎の香の風に乗る  
蔦枯るや犬くしやみして駆け出せり  
蔦枯るや無限大なるあみだくじ  
生花の影は陽に添ひ冬座敷

さいたま 緒方みき子

手に負へぬ土産の飴や初戎  
花がるた最後のカード悪足掻き  
鉛筆を眉墨代り女正月  
インコ等に占領さるる冬座敷  
禍ひの元は口なり寒椿

和歌山 高橋満耶子

年の暮人を呼び込むネオン街  
高速の光芒一閃冬の暮  
冬晴や旅客機あとの長き雲  
冬の晴部屋つばいに朝日影  
歓声の東京ドーム冬の晴

武田重子

なつかしきベীগマ仲間冬の空  
太陽とにらめっこしてふきのたう  
一人分吸ひ込む湯気や寒しじみ  
水仙のほのかに香る仏間かな  
きこえくるのこぎりの音山初め

鬼石 加藤ナヲ子

鴨の群れ一勢に発つ朝の川  
堤まであつといふまに冬帽子  
夜の雪誰か来たかと目覚めけり  
散歩中めがねに当たる霰かな  
去年今年祝ひ袋を二度書きぬ

和歌山 南條きわゑ

淑気満つ目を閉ぢ触るる御神木  
掃除終へ素足を伸ばす炬燵かな  
素甘食ひテレビで過ごすお正月  
鯛焼の薄皮透けて餡が見ゆ  
寒夕焼小江戸城下の時の鐘

さいたま 野村美子

寒風に押し戻されつつ垣摺む  
孫娘は梟夜中過ぎまでテレワーク  
除夜の鐘日記がはりの句帳閉つ  
大寒や鍵かけ忘れ大目玉  
笹鳴けり完成間近や孫の家

藤沢 小島喜代子

雪積もり活気出でくる北の国  
大服や妻に供へて二人して  
きやつきやつと曾孫ひこひこの笑顔で初笑ひ  
四代を生きし感謝の鏡餅  
この分だと百を超えるか屠蘇きげん

川村 治

はんなりと余生生きたし初鏡  
愛犬も席を連ねて屠蘇廻す  
凧揚げが自慢の爺の指さばき  
爺さまの小言は明日に屠蘇廻す  
オリオンを窓より眺め夢に入る

和歌山 嶋田洋子

松すぎて糠漬け小鉢あなうれし  
旧友のお国なまりの初電話  
しづかなる元日なりし団地群  
字面から元氣もらひぬ年賀状  
新婚らし一對麗し門の松

東京 柳父はる

詠み人をまづ読む我が家歌留多会  
新春も進撃若き二冠棋士  
秩父連山遙か幼と若菜摘む  
明日入院の夫に早目の若菜膳  
コロナ禍の大寒同期会日より

宮代 関谷多美子

雪止む夜心臓音はとくとくと  
ラグビーの歓声突如病室に  
小寒や遠く瞬く赤色灯  
もつさりとラヂオ体操寒の入り  
福寿草みんなで密がうれしさう

さいたま 小林京子

円卓を囲み雑煮を祝ふ朝

さいたま 高原和子

コロナ禍のたつた独りの雑煮椀

寒の水飲みて一年つつがなく

炊き立ての飯の白さや寒卵

寒の星呼べば父母こたへさう

奥社までつめる道筋冬桜

家並分けオリオン現れし今日もまた

チカチカと飛行機過る七つ星

部活帰り行手にどんとオリオン座

はく製と一瞬目が合ふ冬座敷

大使館に許可なく伸びぬ枯るる葛

吉方に厄除け札を冬座敷

枯葛に無人交番包囲さる

待春や白灯台の崖に藪

待春や縄跳びの技くらべつこ

早梅や園児見守る地蔵様

初日の出富士と満月輝きて

春日部 仲田利子

東京 飯室夏江

さいたま 小駒さち子

寒中の日差しにとくる汁粉の香

寒中の家路を急かすコロナの禍

裏白や取り皿ひとつ祝ひ膳

前日や裏白飾り白髪染め

年賀状花嫁呵呵の大笑ひ

許されて朝寝昼寝よ風呂吹よ

はばたきに飽きて虚空の冬の鳥

毛糸玉愛深まれば痩せてゆき

大寒の遊歩道に光りかな

歯の欠けし三婆集ひ七草粥

寒四郎一人の海の夜の厚み

風音の強き朝や雑煮膳

まだ眠る鶯の七羽や初景色

家に籠るたいくつな日々春を待つ

山門の小さき早梅見え隠れ

風花か天満宮の梅早し

生かされて卒寿も中過ぎ年祝

籠に入る七種求め粥炊きぬ

祈るごと注連のうらじろ二つ折

さいたま 橋爪さなえ

大阪 遠藤人美

さいたま 山下ユリ子

東京 木村るみ子

東京 河原叔子

前籠の大根の葉も楽しげに  
大根の貴賤料理の腕まくり  
背の子の優しき寢息春隣  
針仕事ひとめひとめの春隣

さいたま 福田育子

父忌日無用の音さく一月来  
冬の朝頭痛歯痛に悩まされ  
放列のカメラに燥ぐ春の風  
ベビーカーに嬰の熟寝や草萌ゆる

伊藤愛子

笑み浮ベコロナを煽る雪女  
クリスマス赤と緑と小雨かな  
冬の鳥川面の炎となりぬ  
寒の夜や波を慰む月明り

大阪 飯塚智恵子

自動ドア開けたままなり雪女郎  
選り好み烈しき人よ雪女郎

さいたま 森 和子

狐火や夫を誘ひて王子駅  
狐火のぼうつと連なる向う岸

拙くも自筆が繋ぐ賀状かな  
ピンヒール鳴らし聖夜の娘がリズム  
腕に縋り妻五味仕込み節料理  
都へと志を抱き出づや花つ月

小川 藤間友二

海沿ひのバス初蝶を乗せてくる  
風船の中に少女のきみがゐる  
半仙戯漕いで砂場に着きにけり

所 沢 関根千恵

短日の老いの手習ひ急ぐ足  
裏白も居住まひ正す青嵐  
春浅し始発のバスに一人乗る

草 加 持永喜夫

鉛筆の減るに減るなり冬籠  
まどろみの臉にとどく雪の照り  
福寿草今年も空と禅問答

さいたま 奥山粉雪

西の空冬夕焼で森燃ゆる  
春近し仲良く遊ぶすずめたち  
春隣峰峰の先富士の山

春日部 増田静司

春近しパン屋の列の長くあり  
冬うららメタセコイヤの高きこと  
コンビニのおでんあれこれデイスタンス

さいたま 鳴海順子

肘をつき浅い眠りに雪女郎  
夫婦酔ひ浮かれて眼覚め雪女  
雪女濡れ髪ゆらし消えにけり

落合和枝

# 作品評

## 山本鬼之介

大寒の飛行機雲の鋒きつさきよ 梅澤輝翠

何気なく見上げた空に、真っ直ぐに伸びて行く飛行機雲。

何故か子供の時代に還ったようなわく感を覚える。大人なら『ああ飛行機雲だ』で済ませてしまうが、幼児の場合は、『あれはなに?』の質問で始まり、大人が『あれは飛行機雲だよ』と答えると、すかさず『どうして出来るの』と、次の質問が来る。普段から、飛行機雲の成因を識っていないと応答に窮してしまうし、大人としての威厳が失墜してしまう。

ジェット機の高温の排気ガスが起因となる水蒸気、飛行機の翼付近の低圧部が起因となる水蒸気。この二つが飛行機雲の成因だが、俳句の上では、このような科学的解説は邪魔になる。研ぎ澄まされた名刀の鋒に譬えたことで、飛行機雲の態様がつぶさに分かる。飛行機雲を題材にした俳句が多い中、掲句のようなシャープな句に出会ったのは初めてである。

満開といふもつつまし冬桜 横山君夫

角川俳句大歳時記によれば、主題・冬桜の中に傍題として寒桜と緋寒桜がある。寒桜は緋寒桜のことで暖地に咲き色が緋色なので結構派手である。本句の冬桜は、長谷川零余子・かな女の句碑がある群馬県藤岡市鬼石町の桜山公園に代表される桜である。花期は十一月頃から翌年の一月頃で、小振りで白色の一重咲きの桜は、春の桜に比べて木が低く小さく、「慎ましい」がびつたりで、華やかさとは別の風情がある。仲間と一緒にではなく独りで訪れ、その清楚な花の中で物思いにふけるのに相応しい冬桜である。

炭の尉そつとそのまま春隣 原田秀子

現代の生活様式での暖房は、エアコンを主体に、ガス・石油・電気のストーブで、昔のように炭や練炭などで暖を取ることが先ず無いと思う。であるから、この句の炭は当然のこと茶室の炉に用いる炭で、その炭に風雅な尉が出来ている。「そつとそのまま」が、転た寝をしている夫を起さぬよう気遣う妻のように、しつとりとした雰囲気を表している。

火吹竹湯加減聞きし頃の風呂 保坂翔太

時代劇ドラマ「剣客商売」の中で、老中・田沼意次の妾腹

の子である佐々木三冬が風呂に入っていると、外の焚き口で、火吹き竹を持った爺やが、『お嬢様湯加減は如何ですか』と湯殿に声を掛けるシーンがある。火吹き竹がその場の雰囲気を出して重要なお道具になっている。

風呂を沸かすのに薪や石炭などの燃料が使われていた昭和時代を懐かしむ火吹き竹が、自宅の物置に残っていたのか、或いは何処かの民俗資料館の展示品の一つであったのか、どちらにせよ作者に取っては、幼少期への郷愁につながる逸品であったと想像する。

老いてなほ滾る闘魂寒稽古 染谷正信

少年の頃から剣道に勤しみ、老境に入った今も柔軟な筋骨を維持している瘦身の男性を思い浮かべる。素足から寒気が這い上ってくる道場で、鋭い気合を発して稽古に励んでいる。老いたりと言えど、その闘魂は発する声に確りと宿り、若い者にも負けじと、道場の中を縦横に動いている。警察署の道場か、大学の剣道部か、或いは民間の道場か。実際にその光景と声を見聞きした経験が活かされた俳句だと思う。

紅さすほどに啄まれゆく実千両 反町 修

秋の南天、冬の千両や万両など、何れもその赤い実の存在感は、実がびっしりと群がっているからで、野鳥が次々やつ

て来て啄んでしまうと貧相な姿になってしまう。女性の寝化粧のような薄らした紅を思わせる「紅さすほどに」の上句の措辞が、実千両の哀れな様子を風雅に表現している。

沼に射す入り日の水脈を浮寝鳥 曲淵徹雄

太陽が西空に沈みかけている時刻。沼の水どりが進む後にできる水脈に夕陽が射して美しい景をなしている。種類の異なる鳥によつて水脈も多様で、見ていると飽きない。夜の帳が降りるまでのひと刻、心が充たされる。

大寒や割られし薪が宙を飛び 西幅公子

太い樹の切株を台にして、その上に薪にする太い木を置き、屈んだ腰を確り据えて一気に鉋を振り下ろす。これが薪割りの極意らしいが、なかなか文字通りにはゆかぬものだろう。すぱっと割られた薪が、その勢いで飛び出した様を小気味よく表現した俳句であるが、作者の若かりし頃、実家かキャンプ場かで実体験したことのように受け取れる。

風花や能登の荒海眼裏に 塩野久子

鬼や亡霊の面を付け、海藻で髪を擬した男達が、波が打ち寄せる荒磯で太鼓を打ち鳴らす「御陣乗太鼓」が目につく俳句である。石川県輪島市名舟町の郷土芸能で県の無形文化

財になつてゐる太鼓の演技は、観る人聴く人を幽玄の世界へ誘ひ込む。御陣乗太鼓をイメージさせる能登の荒海と、郷愁の色彩豊かな風花との取合せの妙に惹かれた。

始まりの音は土から春待てり 越田栄子

「啓蟄」や「蛇穴を出づ」「蟻穴を出づ」などの季語からも感じられるように、春と土は縁が深いように思う。

「始まりの音」とは「春の到来を告げる音」の意であり、土に耳を当ててみると、地下からいろいろな音が聞こえてきそうで、春を心待ちする人々の素朴な気持を表す一句である。

初鶏や「若冲」あらばその声も 丸屋詠子

初鶏は元旦の暁暗に鳴く鶏のことで、昔とは生活環境が大きく変わった都会地で、鶏鳴を聴くことは得難いことだと思ふが、この俳句の作者は、過去に『こけこっこー』を聴いたことがあるのだろう。それに、江戸時代中期に活躍した京都の絵師・伊藤若冲が描いたど迫力の鶏の絵が結びついたものと想像する。初鶏の声に若冲の描いた鶏の声が合体したならばという夢のある俳句である。

もう一人の我を励ます初鏡 野田静香

男性は、日常において鏡に向かう機会は少ないと思うが、

女性は化粧や髪の手入れの他、鏡と対面する機会が多いだろう。何か悩み事のある時やわだかまりのある時など、鏡に映る自分が別人のように見えるのかも知れない。自分の身体の中に別の人格が住み着いているのではというスリラーめいたことを考えてしまうこともあるだろう。この俳句がその心理状態を上手く表現しているように感じる。

鉄瓶の奏つるリズム年新た 日高道を

茶室の炉に掛けられた瀟洒な南部鉄瓶。「ちんちんちん」と湯の滾る音が心地よく響いている。家庭での新年の一服か、初茶会での一齣か。新たな年の希望に満ちたりズムである。

ゆつたりと地球を回す鯨かな 青木鶴城

大海原で巨大な鯨が海面におどり出して反転するダイナミックな姿をテレビ画面で数回観たが、実に迫力満点である。この俳句の発想は、そうした鯨の群れのゆつたりとした行動パターンをヒントにしたものかと思う。

厳しくも美しきかな凍り滝 鈴木和子

日本国内の有名な凍り滝は水瀑の名を挙げると、関東以北では北海道の層雲峡、青森県の奥入瀬溪流、岩手県の七滝、山形県の玉簾の滝、福島県の達沢不動滝、茨城県の袋田の滝

ということになるが、東京都や関東圏に居る者にとつては、袋田の滝がポピュラーである。大量の水が流れ落ちていた滝が凍りついて別世界を作り出す水瀑。掲句の通り、厳しさと美しさを兼ね備えた滝の姿である。

唇に最中張り付く松の内 新井孝磨

雑煮やお節料理にも飽きてきた頃、煎茶でお年賀に貰った最中を食べたら、最中の薄い側がぺたりと唇に張り付いてしまった。害になるものではなく、舌で剥がして食べてしまえばそれまでだが、唇に何となく違和感が残る。新年松の内に体験した些細なエピソードである。

風花をのせてやりたき紅葉の手 渋谷きいち

何処からかはるばる飛来した風花。じつくり観察する間もなくすぐ消えてしまう雪の一片。側に居る幼女も小さな掌をいっばいに広げて風花を捕まえようとしますが、なかなか成功しない。見かねた大人が風花を幼女に渡そうとするが消えてしまつて果たせない。切ない時が流れてゆく。

枯藁の一木抱く生きざまよ 神田治江

春から秋まで生き生きとして樹に巻き付いていた藁が、冬になつて全ての葉を落とし、それでも確りと取り付いている。

その姿は痛々しく憐れみを誘うが、藁は人間の視線を跳ね返し、ふてぶてしい姿を晒している。

冬薔薇午前零時の深き紅 霜多光代

寝室に生けてある冬薔薇であろうか。深夜に目覚めて常夜灯に浮かび出た薔薇を見たら、紅薔薇の色が就寝前に見た時よりも一際濃かった。不思議な思いをした一夜であった。

小吉に微笑む妻や初鵜 檜鼻ことは

夫婦で地元の神社へ初詣に出かけた。引いた神籤は小吉で、まあまあ順当な年になりそうだ。意地悪鴉も今日は心を改め、明るく鳴いている。

箱膳の御節に還るむかしかな 小川洋子

思うところがあつて、昔使っていた正月用の箱膳を取り出し、御節料理を並べて祝つた。箱膳が媒体になつて、いろいろと想い出が甦つてきた。

お年玉紙のお金と三歳児 外村紀子

紙に絵を描いて作ったおもちゃのお年玉。三歳の今年までは騙せたが、来年は本物でないと納得しないだろう。

# 水琴窟

(水明集二月号鑑賞)

池田雅夫

雄渾の卒寿の筆致石路の花

諏訪サヨ子

「雄渾(ゆうこん)」は、勇ましく勢いがいい。気力があつて円熟していること。卒寿を迎えてなお、気力が充実していて、その筆使い墨痕に目を見張るものがある。たたみかけるような響きに石路の花の黄がいつそうひきたつて見える。

頬杖の肘の継ぎ当て冬めきて

阿部幸代

近年は「継ぎ当て」を見ることがほとんどなくなつた。衣服の素材が良くなつたことと、買い換える豊かさがあるからだ。冬に向かつての重苦しさが感じられる。「継ぎ当て」に注目した観察力に感心した。下五を「冬めける」としたい。

寄り添へば水輪重なる葦辺の鴨

外村紀子

番(つがい)の鴨であろうか。日中の水面で戯れている。鴨は、秋に北方から渡ってきて越冬し、春に再び帰つてゆく。帰らないで残る鴨は雛を育て通し鴨となる。枯れた葦の周りでゆつたりと過ごす二羽の鴨。きっと雛を育てるのであろう。

頑なに天衝く赤や冬の薔薇

岡本祥子

夏のバラとちがいがい、すがれた枝に一輪深紅の花を咲かせる冬の薔薇。その凜とした姿を「頑なに天衝く」と詠んでいる。感じたままを言葉で表現する楽しさ、嬉しさを堪能している。

盛岡の城壁照らす初冬陽

山岸久美子

「盛岡城」は、盛岡藩南部家の居城である。現在は石垣、内堀が残っていて、桜の名所として知られている。東北地方の冬はとくに厳しく、それに向かつてゆく心構えをしているのだ。初冬の日ざしがやわらかく城跡を照らしている。

孟冬の夜空はダイヤ散りばめし

篠崎紀子

「孟冬」は冬のはじめのこと。朝夕に寒さを感じるころである。天候が安定し、放射冷却によって一段と冷え込む。大気は澄み、星がまたたいに見える。まるでダイヤを鏤めたようである。日常で見つけた感動の一つと言えよう。

ありたけの懐古に耽り夕時雨

新井のり子

急にばらばらと降りだしては止み、霽れてはまた降りだす時雨。時雨移りというように、山から山へと降り移つてゆくことも少なくない。止む気配のない時雨に、夕時の手の空いた束の間、昔のことを懐しく思い出しているのだろう。

小春日の吊り橋軋む梓川

山中いちい

北アルプスを源流に、上高地を流れる梓川。その吊り橋といえは、やはり「河童橋」であろう。上高地のシンボリックな存在である。夏山のシーズンが終り、紅葉の季節も過ぎ、初冬を迎えた上高地。強い風のせいか、吊橋が軋んでいた。

いつまでも意地張り通すきりぎりす

水野興二

「蟻ときりぎりす」の童話を思い起こさせる。無分別で楽天的に思える「きりぎりす」。漢字で書くと「蝨蝨」で、いかにも変屈そうである。「ギーツ チヨン」と繰り返す鳴き声に、実は「意地張り通す」と感じたのであろう。

着ぶくれて体温計の逃げ回る

和田仁八郎

「体温計の逃げ回る」の措辞にひかれた。腋の下に体温計を挟み計るのだが、着ぶくれているせいかうまく計れないのだろう。そのいらだちを滑稽さに変えた発想に共感する。こういうことが健康を保つ秘訣の一つかも知れない。

煮凝のぶるんと居座る一の膳

緒方みき子

日本料理の正式な膳立てで、一の膳、二の膳、三の膳とある。一の膳は最初の膳で、本膳ともいう。素材を生かした見ごとな料理を堪能している。そして二の膳への期待が膨らむ。

泣き顔の焼柳葉魚喰ふ夕べかな

横山礼子

「泣き顔の焼柳葉魚」とはおもしろい。目刺しや柳葉魚を食べるときに、その顔に注目する人は多くないだろう。魚には臉がなく、目を閉じることがない。焼かれた魚の目は白く濁った感じで、歪んだ顔はまさに「泣き顔」である。

腕自慢火の打ち会の鞆祭り

落合和枝

「鞆祭」は、京都伏見稲荷のお火焚神事の日、鞆を用いる諸国の鍛冶や石工などがこれに倣って、鞆を清めて祭る。鍛冶や石工などの力自慢が大勢加わって実演している。その迫力に圧倒された。「打ち会」を「打ち合ひ」と解釈した。

蟋蟀や声ぼそぼそと散歩道

増田静司

晩秋になると、それまで元気に鳴いていた蟋蟀の音が、たよりない小さな声になった。そこに季節の移り変わりや無常感を重ねている。一月号では「蟋蟀の合唱楽し散歩道」と詠んでいたが、推敲を重ねたのだろう。「蟋蟀の」を推める。

遠まはりして色葉散る坂をゆく

遠藤人美

「遠まはり」に趣を託している。紅葉もやや盛りを過ぎるころ、はらはらと散り始める。錦絵のように散り敷く道もあでやかである。「色葉」を「紅葉」に換えることができる。

網野月を選

山紫集

胎動に触れて春待つ二つの手

丸山マスマ

待春の耳に防災尋ね人

梅澤佐江

吾が待春にファイティングポーズとる

渋谷きいち

不機嫌な針穴なだめ春を待つ

石田 慶子

——以上特選

愚痴を言ふ相手さがして春を待つ

青木鶴城

クルーズの夢は留置き春を待つ

安倍弘夫

春待つや衣紋掛けには淡き色

新井孝磨

ランドセル何度も背負ひ春を待つ

荒井俱子

土手を嗅ぐ犬の鼻づら春を待つ

井口俊晴

待春や思案に暮るる打開策

池田雅夫

こんなにも見えぬ未来よ春を待つ

石川理恵

待春や「て」と「に」はけふも鏡文字

森本早苗

真ん丸なキューピーの目春を待つ

内田恵子

古墳を登る一家三代春を待つ

近藤徹平

好きなき子へパチンと輪ゴム春を待つ

鳥羽和風

待春や女の子と判り未だ見ぬ子

町野広子

春待つやびたり寄り添ふ盲導犬

西幅公子

春待つや山紫水明峽に棲み	井関礼子	諸人のコロナ安泰春を待つ	河原叔子
かくし紅さして八十路の春を待つ	伊藤愛子	うたかたの世を愁ひつつ春待てり	神田治江
待春の水照りまばゆし隅田川	井上玲子	トランペット磨き少年春を待つ	熊倉千重子
待春や四回卒の同窓会	上戸千津子	大安に財布もとめて春を待つ	河野はるみ
独り居の茶髪にしての春を待つ	梅澤輝翠	休符から始まる楽譜春を待つ	越田栄子
製服をたたむ少女の待春	大塚茂子	待春の木立を縫ひてミサの曲	後藤綾子
待春の土塊匂ふ鋤の先	大場順子	故郷よ歎鏽落とし春を待つ	斎藤みよ
春を待つ登り降りの滑り台	岡野順子	自肅解け吟行出来る春を待つ	笹本啓子
待春の逢ふ日のために赤ワイン	小倉倭子	春待つや嫁ぐ日までの親孝行	佐藤克之
畑中の一軒春待つ介護人	加藤むら子	春待つや歩きやすそな靴買ひて	佐々木典子
待春の一年祭のマスク列	葛城千世子	ホーホイとアイヌの踊り春を待つ	下川光子
気に入りの服の見付かり春を待つ	川島典虎	華の菓子ケースに並び春を待つ	菅原真理

三十路過ぎ入学する子春を待つ	杉浦理恵	待春の舟屋に寄せる波光る	外村紀子
今日来むか春待つ鉢の独り言	鈴木藻好	靴並べ北国の子の春を待つ	仲田利子
土匂ひ草撓みたる春を待つ	諏訪サヨ子	春待つや水筒肩にポランティア	南條きわゑ
待春やまづコロナ禍の封じ込め	関谷多美子	玄関に春待つ赤い三輪車	西浦千枝子
病衣着て来ぬかも知れぬ春を待つ	瀬戸雄二郎	みどり児の拳に夢や春を待つ	野田静香
春待つや地球儀回す指の先	染谷正信	我もまた万葉人や春を待つ	野平美紗子
かたくなな空に綻び春を待つ	高島寛治	春待つやサーフボードの光る青	橋本京子
待春やアクリル板のなき対話	高橋満耶子	大向う手ぐすね引きて春を待つ	原田秀子
春待つや物見遊山に下調べ	武田重子	春を待つ都電の車庫に新型車	日高道を
春を待つ鈍行で行く旅の果て	田中章嘉	待春のわが身に軋む骨つ節	藤澤喜久
春待つや肥料の注文点検す	飛永 鼓	春待つやトルコブルーの首飾	福田千春
巫女舞の鈴うち揃ひ春を待つ	十倉和子	黒潮に蛇行の兆し春を待つ	保坂翔太

春待つやマスクゆすぶる大笑ひ

曲淵徹雄

青空は神の傑作春を待つ

柚木治子

待春や湯島に絵馬の呵呵大笑

正木萬蝶

待春や犬の体毛動き出す

野口和子

金管を抱き少年春を待つ

松井由紀子

待春や叩けば軽き木魚の音

伊藤敦子

子供部屋春待つ新調ランドセル

宮崎紫水

待春や十歩歩きし児を胸に

井上燈女

籠もり居の身を守る日日春を待つ

宮崎チアキ

水色の上着買ひ来て春待てり

鈴木和子

春を待つ小さき靴を見せに来る

森川 義子

春を待つ付箋ひらひら時刻表

新 曆文

ワクチンで行き来自由の春を待つ

森下三智枝

待春や倉庫の隅の鎌と鋏

千坂平通

待春のスワンボートは密に揺れ

森田祥絵

星の下分水領の家春を待つ

山中いちい

春待つや心ときめくハイヒール

山田美佐尾

春待つと言ひて友逝く若過ぎぬ

山岸弘子

春を待つ玄関脇の車椅子

湯浅 和

若者に負けじと八十路春を待つ

横山 君夫

ダウン着て妻ふつくらと春を待つ

阿部幸代

新年一月号から山紫集の募集が始まりました。今月号から掲載されます。御投句のうち十句を特選として作品評を書かせて頂きます。なお締切日後の到着分につきましては、選外と致しました。

## 山紫集作品評

### 網野月を

し、真ん丸な目を見ている作者が待春の気分を誘い込まれたとも解釈できます。どちらにしてもキューピーと作者が対面している景が浮かびます。つまり前者と後者の両方の解釈の句意が半々に盛り込まれているのです。

#### 古墳を登る 一家三代春を待つ

近藤徹平

古墳の公園へでも散策へ出かけられたのか、もしくは旧家の墓所（＝古墳）へ一家三代で墓参したのでしょう。「高きに登る」は秋の季感ですが、墓参ならば旧暦の新年を迎える習わしとして「春を待つ」の季語が相応しいでしょう。

#### 好きな子へパチンと輪ゴム春を待つ

鳥羽和風

叙景だけではなくて、十七音にストーリー性を持たせています。読み手のメモリーの中にこの情景とともに淡い想い出も込められているでしょう。季語が句全体を包み込むというよりも、青春を迎える前の一コマが季語の「春を待つ」を惹起しているようです。

#### 待春や「て」と「に」はけふも鏡文字

森本早苗

小学校へ入学前の子の手習いの景と解釈しました。東映映画で月形龍之介扮する水戸黄門が、野育ちの娘に字を教える一シーンがありました。「七」の字の際に黄門様が顎を右にしゃくると、娘の筆先は左へ……となってしまうのでした。句意からは上五を柔らかくして「春待つや」「春を待つ」ということもあるかと思考しましたが、座五の「鏡文字」との関連から句頭も漢字二文字の熟語が至当かと思ひ当たりました。季語「待春」の伝統的な本意本情を踏まえつつ新味をも加味していると考えます。

#### 真ん丸なキューピーの目春を待つ

内田恵子

擬人法的にキューピーが春を待っているとも解釈できます

#### 待春や女の子と判り未だ見ぬ子

町野広子

上五の季語がすべてを支配しています。中七座五の字余り感が、待ちわびる心境を余すことなく表現しています。「かな女」調のリズム感です。

春待つやびたり寄り添ふ盲導犬 西幅公子

よくも盲導犬が出てきたと思います。パートナーと寄り添う盲導犬のツーショットは待春の季感にぴったりです。中七の「びたり」は空間的に把握した叙法でしょうけれども、相思の態をも表現しています。寄り添っているのは人の方かも知れないですね。

胎動に触れて春待つ二つの手 丸山マスマ

やがて生まれ来る子への愛おしみの句を今回二句選びました。「二つの手」の優しさは人生の「春待つ」希望に満ちています。筆者は接続助詞「……て」の叙法に些か推敲の可能性があるように考えます。「……触れ春を待つ……」という方法もあったかも知れませんが。

待春の耳に防災尋ね人 梅澤佐江

毎朝十時にさいたま市南区では「防災さいたま」の町内アナウンスがあります。掲句の防災無線は定時のものではないようです。切れの位置が文法的には中七と座五の間になりませんが、意味的には中七と座五は繋がっています。省略があるということですね。そうすると上五が「……の」で切れを作り出していることになりました。このすっきり感が俳句の醍醐味でしょう。

吾が待春にファイティングポーズとる 洪谷さいち

七、十のリズムです。「待春」は主観的感覚を重視した季語です。そこに「吾が」を重ねることの是非はあるかも知れません。「ファイティングポーズとる」の述語に対する主語の提示を明確にするという意味があるのでしょう。その分、決意に満ち溢れています。

不機嫌な針穴なだめ春を待つ 石田慶子

晩冬は「針供養」までもう少しの時期です。道具に人格を認めること、もしくは求めることは愛用の証左です。愛用の針にもう少し頑張ってもらわなくてはなりません。

大村節代 選

鼓  
笛  
集

意地悪しりフトを煽る春一番  
江の島や白魚井に波の音  
屋根を落つなほ暴走の猫の恋

西幅公子

春帽子赤の付箋の時刻表  
下萌や喜寿の財布に当りくじ  
白魚や五臓六腑のふるへをり

新 曆文

目を伏せて行き交ふ人や春マスク  
悪しきもの洗ひ流せよ春の雨  
木木にほつほつ春の兆しのありにけり

寺内洋子

梅一輪父の面影遠くなり  
福豆や上寿の母のおちよほ口  
亀鳴くやステイホームといふ日常

日高道を

お道具は母のお下がり雛飾る  
雛飾る官女の人差指に疵  
思ひ出を摺り合はせをり雛の間  
母横目に梅の実食むる蒼き過去  
野焼跡濡れて安堵の風流る  
藤の香にむせつひとりの想ひかな

石川理恵

前掛に包み香残る露の臺  
紅梅の紅のただよふ小さき庭  
目で笑ひ大きマスクの近づけり

佐々木典子

三組の雛人形に見詰められ  
立春や犬二匹乗る乳母車  
牡丹の芽心の奥まで見透かされ

南條さわゑ

空の青カンバスにして梅の花  
道の辺の土筆に元氣もらひけり  
求めたるひひなのあられハート型

高原和子

ほつこりと白梅庭に家を灯す  
つつましく老ゆる万感春の月  
身に受くる和き光よ春浅し

河原 叔子

梅散るや明日香美の裳裾引く  
天主堂響くオルガン白樺  
讚美歌の降り来る坂や若葉風

外村 紀子

日矢浴びて風切美しき鴨の陣  
にはどりの潜りて彼方此方かな  
ガバ沼は神の領域白鳥来

諏訪サヨ子

老い若き豆追ひかける節分会  
梯子乗り鳶の囃すや木遣り唄  
母惚び子等と頬ばる草の餅

佐藤 克之

三度目の中止のハガキ春シヨール  
労りて共に春待つ老夫婦  
香の流る駿河茶町の春動く

安倍 弘夫

すくと立つポプラの木々よ冬の晴  
忙しくなく梅の蜜すふ小さき鳥  
ポプラ並木のレース透かして冬夕焼

湯浅 和

## 通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。

主宰 山本鬼之介

- [指導者] 網野月を  
[作品] 7句 [受講料] 1,000円  
[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記  
③84円切手を同封  
④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付  
[送付先] 網野月を  
〒336-0025 さいたま市南区文蔵1-13-3-401  
電話 048-862-5926

## 鼓笛集作品評

大村節代

屋根を落つなほ暴走の猫の恋 西幅公子

猫は寒中から早春へかけて、さかんに妻恋いを始める。赤子の泣くような声を出して、昼夜わかちなく浮かれ歩く。アメリカン・ショートヘアやラペルシヤ猫等の高級猫は家に閉じ込められて猫の恋もままならない。その点、駄猫は幸せだ。道ばた、軒下、屋根から落ちてでも恋は続く。

下萌や喜寿の財布に当りくじ 新 曆文

当りくじが入っている財布の持主が喜寿の人とは、何ともほっこりする。当りの多寡なぞ関係ない。「こいつあ春から縁起がいいわい」ですね。しかし、どんな当りか、ひそかに気になるのも人情。

鼓笛集巻頭（三月号）

私の好きな一句（自句自解） 原田秀子

小夜更けて聴きてもみたし雛の伽

折りしも今日は桃の節句。武州から上州へ興入れしたお雛様は早五十余年になります。娘、孫娘と三代で慈しむ雛の美しいお顔は当時のままです。平成生まれの姫様も仲間入りして今宵はきつと楽しい語らいがあるはず。こっそりと雛の間を覗いてみたいけれど、このままそつと。

目を伏せて行き交ふ人や春マスク 寺内洋子

マスクは冬の季語。春になると風邪も治まり、マスクはいらなくなる。しかし、今年は春になっても、新型コロナウイルスの為に行き交う人は皆マスク、そして、どういうわけか、すれ違う時にふっとお互い視線を外す。マスクなぞしないで春を謳歌したいという悔しさが、目を伏せてという上五で如実に表現される。

# 水明例会

## 第一例会（浦和）

茂木和子  
境延昭報

終バスの消え去る尾灯春の闇  
指切りの指の湿りや春の闇  
出羽の国今どつぶりと雪のなか  
羽二重のほかしの裏地春の燭  
馥郁と土の膨らむ春の闇  
ブルースで踊りたくなる春の闇  
羽田発七時の空や春浅し  
残雪や杖を両手に羽黒山  
寒鴉羽音間近き収集日  
ささらぎや羽を繕ふ神の鳥  
衰へず佐渡能舞台春の闇  
目を瞑り耳そばだつる春の闇  
春浅し出羽三山に坊泊り  
岩陰や羽衣ほどに残る雪  
春の野に遊ぶや諸手羽撃かせ  
剥製の雉子の濡れる春の闇  
思ひ出は順不同にて春の闇

微平 喜恵 光弥 延昭 大場順子 治子 以上特選 微平 稀香 喜恵 光弥 延昭 大場順子 和葉 由紀子

## 第二例会（東京本所）

太田絹映報

水音に船音の乗る春の闇  
春の闇鉄を打つ音耳底に  
雛まつり祖父母の財布羽生ゆる  
白孔雀羽ふるはする春の闇  
海渡る佐保姫の羽衣波閉か  
春の闇ドアーチェンが揺れてをり  
羽の焔けた鴉が一羽寒の朝

マスミ 岡野順子 理恵 治子 和子 貴美子

バレンタイン小さき嘘を箱に詰め  
針穴の小さきに倦み猫柳  
朝東風や国旗掲揚の途中  
ドリツプコーヒーゆつくりおとす春の朝  
健康の本読み漁り二月尽  
春光に小さき両手かざしをり  
強東風に翼預けて鴉舞ふ  
生え際の白髪光るや春立つ日  
朝東風やガラスの窓をたたきくる  
子は小粒納豆が好き朝ごはん  
朝東風やポニーテールの新担任  
料峭の二人であるも独り言  
カプチーノミルク増量東風吹きぬ  
荒東風や言問団子の淡き色  
青饅や小鉢に盛れる祖母の膳  
荒東風やきりきりと鳴る舳ひ綱  
「小生」と宣ふ作家梅真白

いちい 登志子 敏江 玲子 以上特選 敏江 登志子 玲子 峰雄 敏江 寿恵 禮子 鶴城 竺仙 昌弘 登志子 みどり 絹映

## 第三例会（東京）

五明昇  
曲淵徹雄報

海鼠腸が恋の火種をかきたてる  
冬枯や川の貫く機種の町  
横なぐりの雨冬枯れの里眠る  
老梅の力瘤より細き枝  
冬枯の静寂をやぶる灯油売り  
試着室のうぬぼれ鏡春隣  
風花や湖国の駅の発車ベル

康世 雅夫 理恵 大場順子 以上特選 喜久 大場順子 祥絵 萬蝶 理恵 徹雄 康世 昇

## 第四例会（浦和）

境延昭報  
石井喜恵

草青む馬の背光る競馬場  
閃光を放つ小流れ草萌ゆる  
窯場には素焼きのかけら下萌ゆる  
バレンタインデーふはりと届く女文字

寛治 玲子 延昭 昇

ゆつくりとリボン解く父バレンタインの日  
熱気球七色十色草萌ゆる  
由紀子 マスミ

思ひ思ひに吹くりコダー草萌ゆる  
下萌えの風駆け抜けるユニホーム  
恵子 喜恵

畦道に靴の痕跡下萌ゆる  
草萌や郵便受けに招待状  
翔太 寛治

陽を弾き回る水車や下萌ゆる  
あちこちに児等固つて下萌ゆる  
光子 光弥

下萌えに身の青みたる余生  
でんぐり返りの双手に大地草萌ゆる  
順子

掛け声の弾けるピッチ下萌ゆる  
下萌や足の裏より湧く力  
昇修

下萌や夜明け間近の龍馬像  
草萌や徒手突きあげて子の発てり  
由紀子 曆文

急坂を立ち漕ぎ来る子草青む  
自転車の外す補助輪下萌ゆる  
恵子 マスミ

下萌えの地べたに拡ぐ絵の具箱  
喜恵 恵恵

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報  
河野はるみ

早春や表紙華やぐ新刊書  
白魚の眼さやかに皿小鉢  
義子 玲子

早春の土の底より水の音  
早春や少し華やぐ独り膳  
水尾 水尾

早春やきらめく波を分つ水尾  
白魚膳彼の日と同じ小糠雨  
水尾 佐江

——以上特選

篝火を焚きて白魚透き通る  
白魚や鯨気分で躍り食ひ  
美佐尾 理恵

息深くして白魚の躍り食ひ  
白魚や水の如くに移されし  
水尾 水尾

白魚やまなこ逸らして踊り食ひ  
ためらひつゝ啜る白魚をどりぐひ  
はるみ 玲子

白魚をひと呑み紅き唇よ  
若松例会 (京橋)  
石田慶子 報  
正木萬蝶

亡き人は今も少女よいぬふぐり  
春菊を洗ふ葉末のたなごころ  
月を 倭子

くたくたの春菊つつく男の眼  
春菊好き独りとなり鍋の色  
慶子 理恵

春菊を入れて湯気の香ととのひぬ  
生きてゐる証し春菊ほろ苦く  
千春 萬蝶

山ひとつ枯れて木霊の吹きだまり  
春菊や所帯染みたる次女の笑み  
——以上特選

高麗菊街に黙食一野に香氣  
全集中鬼よ失せると豆を撒く  
月を ひろこ

春菊の咲きてさらりと老年期  
目を瞑り鼻つまみ食ふ春菊や  
佐江 水尾

春菊の大人の味を知つたか振り  
茹で過ぎし菊菜菜し方思ひ知る  
倭子 理恵

春菊はよけて肉へと夫の箸  
茎太し春菊くるむ新聞紙  
千春 慶子

待春の蕾合掌の形をして  
マスミ

食卓に残る春菊恨み節  
立春や行く先々の青信号  
鶴城 知子

春菊を茹でて浄土の見え隠れ  
関西例会 (大阪)  
森本早苗 報

唐門を抜けゆく風や牡丹の芽  
源平の海苔粗朶風あそぶ  
玲子

ほぐれむと羽搏く氣配牡丹の芽  
梅一輪咲いたと動画帰れぬ子  
敦子

捨て釜に投げ入れの梅蔵の町  
和らふそく泪をつつと涅槃寺  
早苗 和子

梅寒し一揆の署名放射なす  
牡丹の芽の赤さに力もらひけり  
洋子

牡丹の芽日々精進怠らず  
初午や鄙の祠も供へ物  
——以上特選

梅の花口角上がる仁王像  
春日差す部屋へ移しぬ手芸箱  
千津子 千枝子

コロナ禍の電話長かり浅き春  
三組の雛人形に見詰められ  
千世子 千枝子

如月の弾む雨音お題目  
窮屈に生きたるコロナ下露の臺  
智恵子 早苗

浅春の波止へくづるる波の色  
芳しき春の序曲をトウシューズ  
玲子 水尾

春立つや曙見むと早起きす  
いつ別れ告げてもよき世牡丹の芽  
敦子 洋子

竜宮門くぐるやそこも牡丹の芽  
和子

## 昔話あれこれ

### 兄と夫との板挟み

第十一代垂仁天皇の御代の話。

天皇の皇后には沙本毘売さほんびりが選ばれたが、その時、皇后の兄で天皇の従兄弟に当たる沙本毘古さほんびこは、妹に「夫と兄とどちらが愛しいか」と尋ねた。后は「お兄様が愛しいございます」と答えた。すると兄は、「そなたが本当に私を愛しく思うなら二人で天下を治めようではないか。この小刀で天皇の寝ている隙に刺し殺せ」と言った。

何も知らぬ天皇は後の膝を枕に気持ちよく眠っていた。后はこの機を逃せないと、小刀を三度振り上げたが、どうしても天皇の頸を刺すことは出来ず、溢れる涙を天皇の顔に落としてしまった。驚いて目を覚ました天皇は、「今、不思議な夢を見た。沙本（沙本毘古の本拠地）の方からにわか雨が降ってきて私の顔を濡らした。また錦色の小さな蛇が私の首に纏わりついた。一体何の前兆なのだろう。」

と。皇后はもう隠し通せないと思い、「兄が『夫を兄といづれか愛しき』と面と向って尋ねましたので、私は『兄を愛しきか』（お兄様が愛しいかも知れません）」と答えてしまいました。兄は『私とそなたで国を治めよう。だから天皇をお殺し申せ』と言ってこの小刀を渡しました。三度試みましたが、あなた様への愛しい思いがこみ上げてきてお刺しすることが出来ませんでした。流す涙がお顔に零れ落ちました。天皇の見られた夢はこの事の現れでしょう。」

天皇は「すんでのところでは殺されるところだったのだなあ」と言って直ぐに軍勢を集めて沙本毘古を攻撃した。沙本毘古は稲城いなぎを作って迎え撃った。后は兄への思いを断ち切れず、裏門から逃げて稲城に入ってしまった。この時后は身籠もっていった。天皇はそのことも知り、皇后への思いも深く、稲城を軍勢で取り囲んだまま攻撃できずにいた。やがて御子が誕生した。后は「もしこの御子が天皇の御子だとお思いならお引き取り下さい」と言ってきた。天皇は「沙本毘古は憎いがそなたへの思いは募るばかりだ」と

答えた。天皇には御子を引き取る時に、后も取り戻そうという意図があった。そして力の強い兵士を選び、「御子と一緒にその母君もなんとしても奪い取れ」と命じた。やがて御子を抱いた后が稲城から出てきた。兵士達は御子を受け取るやいなや、母君を捉えようとしたが、後の髪を引く張ると自然に抜け落ち、衣はたやすく破れ、手に巻いていた玉の緒もすぐに切れてしまった。これは天皇の目論見を見抜いていた后が前もって仕組んで置いたからである。

兵士達は后を奪うことは出来なかった。天皇は沙本毘古を討取り、后は兄に殉じた。

この話は『古事記』中巻の大変印象的なエピソードである。

『古事記』では、歌謡に登場人物の思いを託す叙述が多い中で、このエピソードには歌謡は全くない。沙本毘売の複雑な思いや行動が詳細に描かれている。

兄を選ぶか、夫を選ぶかの苦悩は文学上の永遠のテーマなのであろうか。

（丸山マシミ）

各地句会



蝸 蚪 の 会 (浦和)

赤物にそつと寄り添ふ桃の花  
 仰ぎ見る行者還しの春の雪  
 ご褒美にベルギーチョコと桃の花  
 子と見上ぐからくり時計春隣  
 床の間のぱつと華やく桃の花  
 ツアー客の独りとなりぬ桃の花  
 斑鳩の弥勒の笑みや桃の花  
 はれの日や鶴首に挿す桃の花  
 桃の花口先だけと知りながら  
 竹林の渴きを探し雨水過ぐ  
 かわせみ句会 (浦和)

さち子 信一 元美 朝香 宣子 礼子 久子 鶴城 月を

猫柳そこはかとなき恋心  
 猫柳見上げる先の一番星  
 東風の中耳おほきくして君を待つ  
 水明鬼石句会 (鬼石)  
 春遅々と漢方薬にオブラート  
 竹林のしなりにしなり春一番  
 亡き母の植ゑし紅梅満開に  
 春近し予定を入れるカレンダー  
 亀鳴くや夜は疼きし指の傷  
 水明大阪俳句会 (守口)  
 百・二百青竹踏むや春来る  
 日向の匂ひまとひて帰る猫の春  
 疫病の街の土にも牡丹の芽  
 全力で遊ぶ保育士良寛忌  
 追悼のトランペットや震災忌  
 櫻の会 (浦和)  
 口中に広がる海よ蜆汁  
 しじみ汁吸ひ上ぐ音よ黙食よ  
 芭蕉像に逢うて深川あさり飯  
 遠浅を搔きては進む蜆舟  
 道場をかけ声凜と牙返る  
 十三湖しじみ売る娘の津軽弁  
 呪文めくつぶやき聞こゆ浅蜆桶

功 せいじ 育子 和子 聡子 ナヲ子 洋子 紀子 ゆら女 洋子 智恵子 人美 敦子 朋子 富子 千重子 彰二 裕之 克之 治子

光が丘俳句教室 (東京)  
 牙え返る急行電車の通過あり  
 歩行器の母の微笑み犬ふぐり  
 雪女紛れ込んでる上野駅  
 来世では別の名欲しや犬ふぐり  
 鶴川山百合句会 (町田)  
 ワクチンの接種計画梅一輪  
 初鳥ごみ収集日を知つてをり  
 予定通りの人生なんて雑煮餅  
 日日遅遅と修復のわが身去年今年  
 人恋へば触れもせで散る寒椿  
 眉たく描いて私の初化粧  
 初風呂の右足よりはいつもの慣らひ  
 初孫や玩具おもちゃのお年玉  
 賀状二度もらひし友は一興と  
 七日はや一年前を懐かしむ  
 雑煮食ふ嗅覚味覚確かなる  
 双六の禍なき月へと賽を振る  
 神戸大池句会 (神戸)  
 早春の城に一礼明石つ子  
 如月の背のうすうすと千切れ雲  
 片栗の花と折鶴似て非なり  
 春寒や古書肆のあるじ肥後訛

はる 康子 竜也 理恵 廉三 雄二郎 月を 喜久 史代 広子 知子 由美子 千春 萬蝶 理恵 玲子 早苗 礼子 千津子 玲子

新樹の会 (浦和)

春めくや小雨に煙る屏風岩  
春めきて鴉の声も優しげに  
春一番ネックラインを大胆に  
春めくや畑に動く農の影  
春めきて川の底まで露なり  
野を焼けば掛声響く男衆  
心情を覗くや寒の朝鏡  
戦場の遠き思ひを野焼かな

和歌山水明句会 (和歌山)

フェルトの靴赤子に選ぶ春隣  
春寒し諸手に重き火縄銃  
子の部屋へ夫の遺せし盆梅を  
春になる両眼の手術終へし声  
里山の千両太鼓春を待つ  
白転車を変へて浮き立つ春の午後  
目ん玉も凍りつくよな修験径  
裏坂は忍者溜りや牡丹の芽  
りんどう句会 (浦和)  
姿見の顔華やげり春シヨール  
美しく老いむと肩に春シヨール  
待ち合はせ駅へと急ぐ春シヨール  
春シヨール都大路にバスを待つ

道子 京子 韶子 平修 清吉 鶴城  
和子 道子 千枝子 千世子 満耶子 さわゑ 洋子 廸代

春シヨールしゃなりしゃなりと日本橋  
薄水にためらふ鯉のみそかごと  
バス停に女優気取りの春シヨール  
春シヨール羽織りその身に脂肪の気  
薄水を隈無く踏みて登校児  
若き日の岸恵子似よ春シヨール  
春シヨール十歳若く見られたる  
薄水の解けゆく地面穂高岳  
すれ違ふ私語もやはらか春シヨール  
皐月の会 (浦和)  
たつぷりと白湯飲む日日や春の風邪  
白魚の儂さ故の光かな  
早春の谷中散歩の町中華  
一掬ひほどの白魚珍重す  
京菜食み一言なれど京言葉  
水菜鍋今宵奉行は京美人  
さざきサークル (浦和)  
青ぬたや三代使ふあたり鉢  
青き踏むキャッチボールの白き球  
青饅や母の味には程遠し  
青饅を小町の絵皿に美女ありき  
青ぬたや香りふくらむ母の忌に  
青饅やいつみえそめし青い空  
青ぬたの青で引き締む志野の鉢

弘夫 徹雄 サヨ子 卓郎 寛治 翔太 君夫 利子 順子 紀子 静香 孝磨 久文 曆文 さいち 俱子 喜代子 啓子 和枝 かつ子 タイ 和子

たかな俳句会 (川口)  
露味噲は妙味の深き酒の友  
炊きたてのこしひかりには露味噲を  
べピーカー覗けばチワワ春浅し  
浅き春何故かうれしき散歩かな  
灌木に芽生えの気配春浅し  
露味噲の話題世紀を遡る  
露味噲や故郷の空気を混ぜてをり  
しなやかに露味噲練るや白き指  
浅春や光る地の色空の色  
クラシックを聴く牛の耳春浅し  
若狭水明会 (若狭)  
初午や官司は袴翻す  
残雪に農の段取り灰を撒く  
畳屋の看板はがれ残る雪  
初午や鳥羽谷俳句の盛衰記  
低頭の氏子祈願す一の午  
残雪や古代の土器を眠らせて  
初午や行きも帰りも鳥居抜け  
こんこんと女狐はねる午祭  
残雪や人か魔物か獣道  
残雪に戯る子等の歓喜かな  
残雪を撥ねて若木の起ちにけり

久美子 福美 律子 勢津子 鈴木和子 鶴城 義子 真知子 のり子 水尾 静香 初花 和風 白鷺 冬至 保人 郁子 寛久 祥子 想子

青葉の会 (浦和)

春の雨眼科に通ふ夫婦る  
猫柳門出の風を輝かせ

野の川にぎんねずやさし猫柳  
藍に染め乾したる生糸春一番

石切りの水の光や猫柳

猫柳乗れば五分の渡し舟

春の雨はびこる草に待つたなし

春一番墓の線香消し去りぬ

春の雨蛇の目をさして行く二人

りそな俳句会 (浦和)

土筆野や宇宙ロケット発射基地

水温む空からふはり観覧車

浮子睨む太公望や水温む

雑兵の如き土筆の大隊列

食べ頃の土筆選るのも主婦の勘

土筆野に習ひしばかりの歌唄ふ

草の間に負けじ心を土筆かな

ゆるやかに大戸田んぼの水温む

坂東太郎今日はご機嫌水温む

円卓の会 (浦和)

気づかれぬことも幸せ路の臺

カラカラと井戸壊れしや春の庭

美紗子

真理

美智枝

美子

啓子

洋子

和子

輝翠

曆文

寛治

道を

雅夫

久美子

建治郎

京子

勲

マスミ

輝翠

静香

輝翠

蒸鱧若狭の酒をさあ一献

決壊の疵痕癒す花林檎

春暁や二度寝を期する枕水

トレイルは次の秘境へ露の臺

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

早春のチューブの青を絞り出す

春寒し一人腕組む並木道

降り下ろす刃の唸り寒稽古

大寒や我が手に固きジャムの蓋

春寒し踵で測る骨密度

蔭の臺厨の水の走り出す

じやんけんで決まる席順クロッカス

風花や富士を遠見の一万歩

水明小川句会 (小川)

切り株を椅子に借りたり春の山

すり足で春が来ている山の寺

薄雲のヴェールの奥のおぼろ月

春雨がへだてて畑が遠くなり

揚げ立てのコロッケ提げて春の夕

野ばらの会 (浦和)

息ひそめすくすく伸びる洞の独活

ワクチンを打たぬと夫は独活を食む

山独活のもてなしに酔ふ峡の宿

翔太

道を

月を

鶴城

芽吹句会 (浦和)

延昭

淑子

俊晴

千恵子

俱子

美枝子

正信

昇

若鮎句会 (浦和)

熱き茶を啜る棟梁春浅し

春浅き荒川越しの武甲山

鶯も高鳴りほぐすやぐぜり鳴き

短調に鳴く鶯に立ち尽くす

春兆すびよんと児の出る園のバス

合格を三世で祝ふ雛祭り

風花をばあつくりぱくり味見して

春浅しケキョケキョの声まだ遠く

鶯も緊急事態声聞かず

各停の窓の陽光春浅し

鶯や肩のリユックを岩の椅子

独活食めば一気に野生目覚めたる

独活を食む夫婦はもちろん幸せに

酔を利かせ余酔の朝の独活なます

名人の籠にゆさゆさ山の独活

栄子

治江

和子

みき子

芽吹句会 (浦和)

千重子

玲子

富子

ひろこ

道

若鮎句会 (浦和)

稀香

芳江

喜夫

万美

さなえ

順

みえこ

まり子

幸代

月を

鶴城

鶯

城

鶯

城

水明熊谷句会 (熊谷)

山神の笑雀愛らし山笑ふ  
目刺焼く母息災の影を曳き  
釣舟の影ゆるやかに山笑ふ  
故郷に住む私の分身山笑ふ  
炙らるる目刺のまなこ立つ炎  
七輪に目刺一串独り酒  
清流をたどる参道山笑ふ  
ほろほると小さき目刺に小さき骨

雛の会 (浦和)

浅春の音を吐き出すレジスター  
丸木橋渡る近道犬ふぐり  
春浅し窓なき納屋に人の声  
春浅し手を太陽に透かしみる  
春浅し葉缶一途に磨きけり

俳句の手ほどき (岩槻)

天守から町の果までかすみけり  
水菜採る武州のをんなよく笑ふ  
北の果軋み哭きつつ流水来  
水菜採る膨らみ初めし甲斐の山  
培ひし水菜一葉もいとほしや  
京菜を洗ふ水に流せし漫ろ言  
春場所や背を押さるる果て太鼓

秀子 燈女 沼江 栄子 徹平 正行 和子 茂子

しやきしやきと水菜を食べる潔さ  
宇宙にも果てはあるはず亀鳴けり  
小五郎の幾松が味京菜かな  
検診の結果正常春まぢか  
もてなしの京のぶぶ漬水菜漬  
豚しゃぶの水菜の香り一人膳  
水菜切る店主つれなき東人  
はじめから釣果なかなか一花草  
ミモザの会 (横浜)  
下萌の小径甘えた子は母に  
葉包紙律儀にたたみ梅白し  
下萌やテント張られて地鎮祭  
曲がりたる鉄柱ひとつ下萌ゆる  
土手青む足投げ出せば飛行機雲  
下萌や地球に産毛生えさうな  
下萌や焼きたてパンの通り過ぎ  
デコボンや臍を掻き出すナースの手  
下萌や補助輪はつし漕ぎ出しぬ

美佐尾 徹平 翔太 忠男 幸代 美子 卓郎 かつ子 亜弥子 栄子 慶子 玲子 知子 史代 由美子 萬蝶 千春

櫻蔭句会 (浦和)  
結願に梅一輪の狭険路  
海の色まだ残りたる目刺焼く  
目刺の眼黒き穴より海の風  
なにごとくも蘊蓄父の目刺焼き  
目刺焼く煙の向かう幼き日  
満開の白梅の空真青なり  
寡黙なる祖父は目刺にコップ酒  
ふるさとのあの坂の梅咲く頃ぞ  
目刺焼き思ひ浮かべし父の膳  
水明松本句会 (松本)  
春寒や甘えを知らぬ世を生きて  
春浅し背中合せのさむさかな  
睨むなよこれは花粉のくしやみだぜ  
らう梅の香りに誘はれアダージョで  
どこからか風の囁き梅三分

茂子 真理 千恵 由紀子 道子 美智枝 多美子 幸代 恒子 陽子 マリス 玲子 寿子 和代 京子 文子 孝男 鶴城

珊瑚の会（浦和）

杖を持つ老いの眼光野火猛る  
 風呼んでよんで抜ぐる野焼の炎  
 うぐひすや馬塞ませにゆるみの一処  
 野焼の火速巻きにして岬馬  
 風が火を火が火を煽る野焼かな  
 お日柄も良しと鷺正調に  
 ひらひらとサロンエプロン春告鳥  
 うぐひすやトロツコ進む森の奥  
 太陽をとらへむと野火立ち上がる  
 野を焼くは大火遊び勢子走る

桜林句会（大宮）

マスクして眼さらさら登校児  
 鮫鱈鍋五臓六腑を余さず  
 念入りに眉を描きてマスクせり  
 眉太き男の面輪黒マスク

和葉

かつ子

喜恵

マスマ

水尾

昇

恵子

史代

和子

節代

知子

光子

光代

美佐尾

☆ ☆

水明通信

コロナ終息を 寺内 洋子

大阪句会は、十二月まではなんとかが  
 んばって句会をしました。が、一月・二月  
 は会場の都合もあり集まることができず  
 寂しい思いをしています。

集まって意見や考え又は無駄話等に、  
 花を咲かせるのを楽しみにしていたの  
 に。ひとりしよぼしよぼと選句をし、敦  
 子さんから結果の報告を受けそれでおし  
 まい……。何とも味気ない。

年寄り優先の予防接種も、私はいいか  
 ら休めない仕事の三人の子供たちにと  
 思っています。個人的な気持ちとはと  
 もかく、一日でも早い終息を願っていま  
 す。

我が家から道路ひとつ隣の府立山田  
 池公園、行きどころのない(?)人でいっ  
 ぱい。子連れ・犬連れ・夫婦連れ等、に  
 ぎやかでした。梅林がいい香りをさせて  
 います。ヌートリアの親子や渡り鳥もい  
 て経費要らずの楽園です。

◆原稿募集

季音（雪・月・花）五句

水明集 五句（巻末添付用紙）

鼓笛集 三句

（編集部より依頼のあった方）

※二百字詰原稿用紙使用。右上欄外に、

季音（雪・月・花）・鼓笛集と朱書き。

水明通信・随筆等自由にお送り下さい。

原稿締切 毎月二十五日必着

原稿宛先 水明俳句会 編集部

〒330-0064 さいたま市浦和区岸町

四一〇一一

## 水明全国大会のご案内

【と き】 2021年6月29日（火曜日）

【ところ】 浦和駅東口パルコ9階第15集会室

ロイヤルパインズホテル浦和からパルコに変わります。  
詳細は5・6月号に発表。

【行 事】 水明賞・季音賞・かな女賞・新珠賞の授賞  
新誌友紹介者の表彰。季音同人、新同人の発表。  
兼題入選句の発表と授賞、講評等。

5、6月号に添付の指定用紙を使用し、参加費を添えて発行所総務部へお申し込み下さい。（申し込みは5月1日～6月15日をお願い致します。）

担当：事業部

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊俳句界

2021年5月号

特集

## 俳句と短歌

○巻頭エッセイ 堀本裕樹／○俳人の短歌

高山れおな／○歌人の俳句 西村麒麟

○俳句と短歌(作品とエッセイ)

秦夕美 藤原龍一郎 佐々木六戈

喜多昭夫 堀田季何うにがわえりも

○歌人が詠んだ俳句 東直子 堂園昌彦

○題外の「短歌」、漱石の「俳句」 坪内稔典

特別作品30句

小川軽舟

☆ラビエ 俳句界NOW 高崎公久

## フォト俳句の楽しみ方

◎フォト俳句の楽しみ方 如月真菜

◎フォト俳句に挑戦!

名和未知男 村上喜代子 小林貴子

堀切克洋 藤原暢子

発表! 第13回文學の森賞

★セレクション結社「万象」江見悦子

私の一冊 楠田哲朗「貝の会」

対談

森 功 フォト俳句作家

別冊 投稿俳句界 一流選者14名!  
日本一充実の投句欄

※一部変更の可能性あります。



株式会社文學の森

お求めは... ●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 水明全国大会 兼題句募集

水明全国大会の兼題句を次のように募集します。ふるって御応募下さい。

兼題 「春の夜」(はるのよる) 春夜・夜半の春・春の宵・春宵・宵の春

「野遊」(のあそび)

山遊・野がけ・春遊・ピクニック

※「春の夜」「野遊」は右の季語で詠む事

「話」詠込み

※「話」は春の季語を入れて詠む事

例句 土筆の袴とりつつ話すほどのこと

大橋敦子

桃咲くと鉄線の棘へだて話す

岡本 眸

句数 通じて二句。(一組)

・一題で二句でも、両題込みで二句でも可。

・組数は制限しない。

出句料 一組につき千円。

締切 五月十日(発行所必着)

※投句用紙(水明三月号・四月号に添付)使用のこと。コピーも可。

## 水明忌のご案内

- [日 時] 2021年4月30日(金) 午前10時受付 12時開会
- [会 場] 浦和駅東口 浦和パルコ9階 第15集会室
- [投 句] 2句 夏近し(夏どなり)、蝌蚪(蛙の子・お玉杓子)
- [参加費] 1,500円 (お茶付・昼食はなし)
- ※コロナの時節柄、懇親会は行いません。
- [申 込] 参加費を添えて、4月20日(火)までに総務部宛

担当：事業部



定価(本体700円+税)  
新書判/並製/本文152頁  
ISBN978-4-04-884409-3

選考委員  
宇多喜代子  
大串章  
長谷川權  
復本一郎

### コロナ禍の日常から生まれた かけがえのない一句

「神奈川大学全国高校生俳句大賞に  
寄せられた二三、八三九通の応募の中から  
最優秀賞はじめ入選作品と、  
選考座談会、四人の選考委員による  
特別エッセイなどを収録。」

素振りあと百回風よ夏空へ  
散る桜バイクゆつくり流すとき  
秋風の中なる人と目の合ひぬ  
秋涼し地層のごときチヨコケキ  
夏休み一人称を「私」にす

高校生俳句の珠玉の作品集

# 17音の青春 2021

五七五で綴る高校生のメッセーじ  
学校法人神奈川大学広報委員会編

電子書籍も好評発売中！「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。



KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA

●〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 ●TEL. KADOKAWA 購入窓口 0570-002-008

## 水明発展基金御礼 (敬称略)

— 令和三年二月二十八日現在 —

山本鬼之介	50	匿	名
内田恵子	2	柚木治子	2
五明昇	10	青木鶴城	2
村杉清吉	2	岡田宣子	2
大場順子	10	網野月を	2
新春俳句大会中止に より基金へ		山岸久美子	2
丸山マシミ	2	綿貫ひさの	2
日高道を	2	井口俊晴	2
山田美佐尾	2	松井由紀子	2
森川義子	2	菅原真理	2
茂木和子	2	森下美智枝	2
田中章嘉	2	大村節代	2
曲淵徹雄	2	石山かつ子	2
池田珪子	2	大場順子	2
内田恵子	2	石井喜恵	2
西幅公子	2	矢作水尾	2
合計	126		

## 「水明発展基金」からのご挨拶

平素は、当基金に格別のご高配を賜り厚く御礼申し上げます。  
水明俳句会の運営は、皆様からの誌代・同人費を主体とした収入に加え、水明発展基金からの支援金によって賄われております。

令和2年度におきましては、皆様から180万円を超えるご支援を頂戴し、この中から150万円を支援金として水明俳句会の令和2年度決算に充当させていただきました。

会員皆様の日頃のあたたかいご支援に対しまして、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

4月から令和3年度の運営がスタートいたしますが、引き続き皆様からのご支援を宜しくお願い申し上げます。

今月号に、発展基金口座の郵便振替用紙を同封しておりますので、ご利用いただければ幸いです。

末筆ながら、会員皆様のご健勝ご健吟を祈念申し上げます。

令和3年4月1日

水明発展基金 会長 山本鬼之介  
水明俳句会 主宰

風 声

○現代俳句二月号——「現代俳句の風」欄

潮の香の入り込む朝の布団部屋

菊池ひろこ

農政を論じて滾る牡丹鍋

染谷正信

○天塚（宮谷昌代主宰）一月号——「珠玉一句」欄

袖濡らす夜露も粹に女坂

鬼之介

○草笛（太田土男代表）二月号——「受贈誌一詠」欄

目明しの伝七の町枯柳

鬼之介

○くぢら（中尾公彦主宰）二月号——「受贈俳誌美術館」欄

マスクして吾が福耳のたしかなる

鬼之介

○好日（高橋健文主宰）二月号——「受贈誌御礼」欄

袖濡らす夜露も粹に女坂

鬼之介

○新月（松田碧霞主宰）二月号——「受贈俳誌紹介」欄

実千両これぞ旧家の門構へ

鬼之介

○太陽（柴田南海子主宰）二月号——「一誌一耀」欄

部屋占むる鉄道模型暮早し

鬼之介

○菜の花（伊藤政美主宰）二月号——「諸家近詠」欄

目明しの伝七の町枯柳

鬼之介

（日高道を抄出）

# 俳句

## 5月号 予告

4月24日発売

予価1,040円(10%税込)

特別作品— 西村和子・深見けん二・佐怒賀正美

### 省略を極める

総論 何のための省略か／何を省略しないのか／主語の省略と動詞の省略／季語によって省略できること／季語・切れ(切れ字)によって省略できること／推敲のチエックポイント／秀句徹底解剖何をどう省いたか／鑑賞「省略」の読み方

#### 特集 実作

鑑賞特集 **壮観！圧倒的にうまい句**

短編俳句小説 **宮部みゆき『ほんほん彩句』**

連載 **昭和俳句史**……………川名大

特別 寄稿 **新資料に見る久女の実像**……………坂本宮尾

付録 **季寄せを兼ねた俳句手帖** 夏

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

## 後記

春になると、南北に細長い日本列島の桜前線をテレビは連日伝え、私達はわくわく。ところが今年は開花をちよつと伝えてから、連れ立ってお花見に行かないようにと、必ず言い添えます。何とも味気無い春でした。そうこうしている内に、風光るの季節です。これから水明の大会や行事、各句会が正常に開けるようにと思えます。

「水明」は今月号から、「山紫集」が始まりました。選者網野月を氏は、全投句の中から、一位から十位まで、十句特選に選び句評をし、それ以外の句は、あいうえお順に並べたようです。

尚、五五頁によると、山紫集の投句は、規定通り発行所に二五日に届かない場合は選句対象外になり、全投句の最後に掲載されます。

どうぞお早目にご投句を。

尚、誌友の方には投句資格がないのでご注意ください。そして今年も、各句会の責任者の方を通じて、同人になられるようお願いがあると思います。同人になると山紫集、鼓笛集に投句が出来ますので、お考え下さい。

コロナ下でも、主宰・総務部・編集部は、平常と変わらず仕事を続けています。総務部は会員の管理事務やら水明運営に関する事務等、あらゆる事を引き受けて、頑張っています。その点編集部は水明誌の発行と誠にシンプルです。しかし一号も休まず発行しています。しかし、これらは全て会員の皆様が、お元気で、投句をしたり、会費を納入したりのご協力あつたのこそです。ご協力お願いします。

(節代)

今月のはてな？

一花草(いちげそう)  
羚羊(かもしか)  
炯炯(けいけい)  
吹越(ふっこし)  
鱧(たなご)  
噤(つぐ)む  
花つ月(陰曆三月の異称)  
トレイル(自然散策道)  
ぐぜり鳴き(さえずりの練習)

頁 15 16 34 35 39 40 45 66 66

## 水明発行所受付時間

曜日：(月・水・金)  
時間：午後1時～午後5時  
(火・木・土・日・祭日は休み)  
水明の行事と重なった時は休み  
(上記の時間には係がおりますので、  
ご用の方は 時間内をお願いします。)

## 水明

令和三年四月号  
通巻一〇八七号  
令和三年四月一日発行

### 発行人

山本 鬼之介  
〒330-0073 さいたま市浦和区元町一七二一八  
電話 048-1886-1600三

### 発行所

水明俳句会  
〒330-0064 さいたま市浦和区摩町四一〇二二  
電話 048-1822-1474一

### 誌代

半年分 六、〇〇〇円  
一年分 一二、〇〇〇円

### 同人費(誌代を含む)

一年分 二四、〇〇〇円  
季音同人費(誌代を含む)

一年分 三〇、〇〇〇円  
振替〇〇一七〇〇一〇一九三九三

### 印刷所

中央美版













## 季音抄

山本鬼之介

唐門を抜けゆく風や牡丹の芽  
告白が闇に溶けゆく春の夜  
春の闇ドア・チェーンが揺れてをり  
楽譜閉ぢ振り向く窓に春の月  
青饅やひと言多き人ばかり  
家中の時報まちまち春の闇  
牡丹の芽百花の王の目覚めかな  
打つ波を征し寒暁沖の石  
立春の鯉美くしき水輪かな  
麦三寸こぞりて育つ田の広さ  
つくし野にコーラスの湧く昼下り  
試着室のうぬぼれ鏡春隣  
山ひとつ枯れて木霊の吹きだまり  
結願に梅一輪の峡険路  
寒月や首塚晒す大手町  
公魚や吾も湖上の氷点下  
早春に少し華やぐ独り膳  
別れ霜発車合図の無き駅に

田寺玲子  
永野史代  
西山貴美子  
波多野寿子  
星野和葉  
茂木和子  
森本早苗  
宇田白鷺  
鳥羽和風  
井上燈女  
丸山マスミ  
大場順子  
正木萬蝶  
大塚茂子  
近藤徹平  
宮崎チアキ  
河野はるみ  
飛永鼓

次の原稿を募ります。随時発行  
所宛、ふるってお寄せください。  
なお掲載については、編集部にお  
任せねがいます。

### ▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽  
に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内  
(句に雑誌名、句集名、刊行月  
を付す)

### ▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起  
きた面白い話題、めずらしい経験  
などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内  
(題をつけて)

### ▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

# 水明抄

山本鬼之介

大寒の飛行機雲の鋒さきつひよ  
 満開といふもつつまし冬桜  
 炭の耐そつとそのまま春隣  
 火吹竹湯加減聞きし頃の風呂  
 老いてなほ滾る闘魂寒稽古  
 紅さすほどに啄まれゆく実千両  
 沼に射す入り日の水脈を浮寝鳥  
 大寒や割られし薪が宙を飛ぶ  
 風花や能登の荒海眼裏に  
 始まりの音は土から春待てり  
 初鶏や「若冲」あらばその声も  
 もう一人の我を励ます初鏡  
 鉄瓶の奏づるリズム年新た  
 ゆつたりと地球を回す鯨かな  
 厳しくも美しきかな凍り滝  
 唇に最中張り付く松の内  
 風花をのせてやりたき紅葉の手  
 枯蔦の一木抱く生きざまよ

梅澤輝翠  
 横山君夫  
 原田秀子  
 保坂翔太  
 染谷正信  
 反町修  
 曲淵徹雄  
 西幅公子  
 塩野久子  
 越田栄子  
 丸屋詠子  
 野田静香  
 日高道を  
 青木鶴城  
 鈴木和子  
 新井孝麿  
 渋谷さいち  
 神田治江

句会名	日時	会場	指導者	幹事
第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	山本鬼之介	茂木和子 境延昭
第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	太田絹映
第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五曲明昇 淵徹雄
第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミセン (パルコ 10F)	椎野美代子	境延昭 石井喜恵
第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤佐江 河野はるみ
若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	石田慶子 正木萬蝶
関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化センター	大橋勉代	森本早苗

## 水明例会案内